秋田県文化財調査報告書第35集

鹿角大規模農道発掘調査略報

1975－4

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

鹿角大規模農道
発掘調査略報

1975－4

奥山　潤

田村　栄

大里勝蔵

秋田県教育委員会

例　　言

1　この報告は，昭和49年９月13日から10月10日までの期間実施された，「鹿角大規模農道調査」の略報である。実質調査日数は７日間である。

2　調査責任者は，秋田県教育長　山本　一であり，担当者は，奥山　潤である。

3　執筆は，担当者奥山の指示と助言をうけ，地形・地質及び石器については田村が，その他は構成をも含めて大里が記述した。

4　出土遺物は土器が主であり，その量も多かったが，ここには，昭和48年採集分も一括してその一部を載せた。なお土器についての考察は，今後の作業として十和田高校にて作業中である。

5　遺物の整理，実測図及び拓影は，十和田高校社会科同好会があたり，その構成と写真は，フィールド，遺物ともに大里が撮影した。

6　遺物は全て十和田高校に保管されている。

目　　次

例　　言
目　　次
図・図版目次
序
Ⅰ 緒　　文 …… 1
　　調査組織
Ⅱ 地形・地質 …… 2
Ⅲ 調　　査 …… 4
　1 A地点 …… 4
　2 B地点 …… 6
Ⅳ 出土遺物 …… 7
　1 完形・復元土器 …… 7
　2 土器破片 …… 10
　3 底　部 …… 19
　4 土製品 …… 20
　5 石　器 …… 21
Ⅴ 考　　察 …… 24
Ⅵ 総　　括 …… 24

図・図版目次

Fig

Fig　遺跡位置及び周辺地形図
Fig 2　調査地点図
Fig 3　A地点トレンチ土層図 …… 3
Fig 4　トレンチ実測図(A地点) …… 5
Fig 5　B地点トレンチ図 …… 6
Fig 6 (a) 完形・復元土器実測図 …… 8
Fig 6 (b) 完形・復元土器実測図 …… 9
Fig 7 (a) 第1種土器 …… 10
Fig 7 (b) 第1種土器 …… 11
Fig 8　第2種土器 …… 12
Fig 9　第3種土器 …… 13
Fig10　第4種土器 …… 14
Fig11　第5種土器 …… 15
Fig12　第6種土器 …… 16
Fig13　第7種土器 …… 17
Fig14　第8種土器 …… 18
Fig15　土器底部実測図 …… 19
Fig16　土製品実測図 …… 20
Fig17(a)・(b)　石器実測図 …… 22・23

PL

PL 1　A地点土層 …… 3
PL 2　完形・復元土器 …… 27
PL 3　完形・復元土器 …… 28
PL 4 (a)・(b)　第1種土器 …… 29・30
PL 5　第2種土器 …… 31
PL 6　第3種土器 …… 32
PL 7　第4種土器 …… 33
PL 8　第5種土器 …… 34
PL 9　第6種土器 …… 35
PL10　第7種土器 …… 36
PL11　第8種土器 …… 37
PL12　土製品・石器 …… 38
PL13　石　器 …… 39
PL14(a)・(b)　昭和48年農道工事A地点 …… 40・41
PL15～24　A地点発掘調査現場写真 …… 42～51
PL25(a)・(b)　B地点写真 …… 52・53

Fig 1　遺跡位置及び周辺地形図

Fig 2　調査地点図

序

鹿角大規模農道は，鹿角市花輪から小坂町に至る総延長15.1kmにわたる基盤整備のため計画された農道であります。この予定路線内に所在する遺跡の事前調査は昭和47・8両年その一部発掘調査を終了しております。

今年度は鹿角市十和田大湯字一本木及び草木字小坂の両地区の調査を行い，今後の研究調査に資するため記録保存をすることになりました。

本報告書が関係の皆様の参考になれば幸いであります。おわりに調査を担当された各調査員，ご協力をいただいた鹿角市教育委員会，鹿角農林事務所土地改良課の方々に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和 50 年 3 月

秋田県教育委員会

教育長　山本　一

I　緒　　文

「鹿角大規模農道」は，鹿角市花輪から，鹿角郡小坂町に通じる幅員7.50m，総延長15kmの農道であり　鹿角盆地の東方を南北に貫いている。

当初の予定では，昭和49年度中に完工の見通しであったが，路線の変更及び土地買収の関係で，いまだ貫通していない。

工事は，昭和46年より始められ，分布調査は昭和47年に，発掘調査は昭和48年盛夏に行なわれた。[1] しかし，前記分布調査と発掘調査は，路線を完全にカバーした結果行われたものではなく，事前調査もなく破壊された遺跡も計りしれない。

この報告は，昭和49年９月より10月まで実施されたものであるが，A地点は後述するように，工事により偶然発見されたものであり，B地点は，再三の路線変更による３本の予定路線の１個所を分布調査の意味を含めて調査したものである。

調　査　組　織

調査責任者　山本　一（秋田県教育長）

調査担当者　奥山　潤（秋田考古学協会員）

調　査　員　田村　栄（大館市立城南小学校教諭）

早坂敏和（県立十和田高校教諭）

大里勝蔵（県立十和田高校教諭）

発　掘　員　十和田高校社会科同好会

松岡孝子　奈良聖子　瀬川明子　長田美代子　中山美千代　石井つえみ　佐藤悦子　福士多恵子　浅石淳子

十和田高校定時制大湯分校

黒沢由子　大森礼子　柳館敏子　工藤和子　柳沢康子　柳館　貞　大森陽蔵

(1)「鹿角市小坂町大規模農道調査報告書」S48．12　秋田県文化財調査報告書第29集

Ⅱ 地　形・地　質

1 地　形（Fig 1・Fig 2）

鹿角盆地の東部，通称菩堤野の地に，広大な扇状地が形成されている。その北縁は，いわゆる風張台地を中心とする広大なシラス台地に接する。台地上には多くの小侵蝕谷が刻みこまれ，扇状地に流れこむものが多い。

本遺跡も，この菩堤野扇状地の北縁に位置する。下草木部落の北方約 500mにある，小さな侵蝕谷の扇端への出口付近に存在する。この侵蝕谷は，台地と扇状地との境界付近を西流する根市川に合流しており，当時は，当然湿地状であったと考えられ，遺跡は谷の出口の，いわば入江状の部分に広がる湿地帯にのびる台地の，裾部分に営まれたものであろう。

周辺の，扇状地縁辺に接する台地，及び台地斜面は，果樹園・畑地として利用されているが，各所に遺物の散布がみられることからも，数多くの遺跡の存在が考えられる。また館状遺構等の人為的な地形も観察することができ，今回の発掘個所の背後にある急崖や，用水堰なども，空濠のように思われる。

遺跡からの付近の眺望はすばらしく，南方には，広大な菩堤野扇状地が開け，さらに後方には，鹿角盆地をとりまく山並を望むことができる。また西方すぐ近くには，軍森の独立丘（ 206.6m ）が目につき，その西方には，根市川が南流している。

なお，本遺跡の東方約 1.5kmには，大湯環状列石を中心とする縄文後期の大遺跡が存在する。

2 地　質（Fig 3・PL 1）

トレンチ断面より観察される土層について，簡単に記すと，土層は上位から順に，黒色表土層，大湯浮石層，含炭・含浮石黒色混土層，粘質暗灰色土層，粘質灰褐色土層，砂質赤褐色土層の 6 層が認められる。

第Ⅰ層の表土層については，現有層厚は約12～15cmであるが，地主の話によると，表土はこれまでに，植林や畑地として利用されてきており，近くの水田への客土のために，相当量削り取られたという。実際は，現有厚以上の層厚を有していたものと思われる。

第Ⅱ層の大湯浮石層については，0～8cmの厚層を有し，欠除しているところもあるが，これは前述の事実が，第Ⅱ層にまで及んでいることを物語るものであろう。同時に客土，あるいは起耕が次の第Ⅲ層の遺物包含層にまで及んでいることも，十分考えられる。

第Ⅲ層は炭質物，浮石等をやや多く含む黒色混土層で，遺物包含層である。遺物の包含は，層全体に及んでいるが，遺構内の下層に完型品の包含が多い。なお第Ⅲ層は，遺構内の土層も一括してⅠ層とみなしたが，ある程度の細分が可能であるかもしれない。層厚は約12～60cmを有する。

第Ⅳ層は，やや粘質の暗灰色土であるが，層相から，遺構構築に際して，堀り下げた第Ⅴ層に相当する土を，積み上げたものであるとも考えられる。

第Ⅴ層は，粘性の強い灰褐色土で，やや硬くしまっている。

第Ⅵ層は，腐蝕物（植物体）を多く含む赤褐色の砂質土で，遺構内にある石類は，これに密着しているものもある。

第Ⅳ～第Ⅵ層は，層相から扇状地堆積物で，この谷の運搬物であると考えられ，遺物の包含は全くなかった。

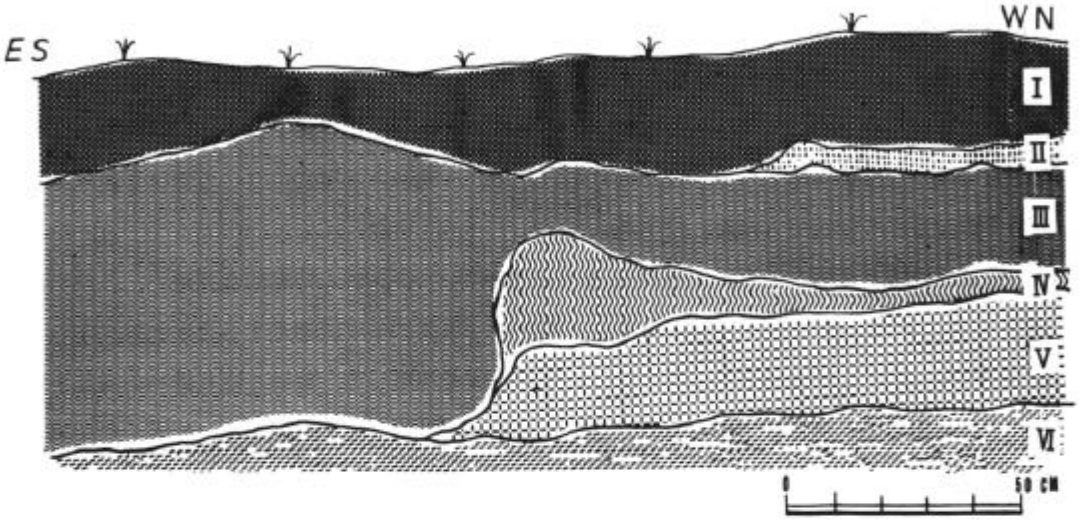


Fig 3　A地点トレンチ土層図

PL Ⅰ　土　層　（A地点）

Ⅲ　調　　査

1　A地点（Fig 2・Fig 4）（PL15～24）

昭和48年10月，前年度調査の第４地点，丸館表[1]南方 100mの地点で，農道側溝工事中，ショベルローダーにより，遺物が出土したとの報に接した。鹿角市文化財係長柳沢兌衛氏と大里は，現場に急行した。埋設された側溝用U字溝の上には，大量の土器片が採集されていた。付近の大きく削られた法面には，性格不明のピットが認められた。直ちに現場で，工事責任者に重要性を説き，工事を一時中断してほしい旨申入れた。（PL14(a)(b)）

すでに秋霜の降りる頃であり，工事関係者も調査体制についても時期的な問題で，長期に中断し調査することはとうてい不可能だった。このため，昭和49年度に調査することとし，とりあえず側溝及び法面により破壊される部分を，11月の連休を利用して，可能な限り遺物の採集を行なった。これは決して，調査といえるものではなかった。調査費用は１円もなく，ただ十和田高校社会科同好会の生徒諸君の好意によるものだった。採集された遺物は，リンゴ箱２個分の土器破片と，少量の石器類だった。

昭和49年度発掘調査として，前記の理由からA地点を選定した。以下調査日誌を中心に記述する。

9月13日（金）　晴

植林された杉を伐採し，ブルドーザーで抜根及び表土の除土。

9月14日（土）　晴

午前中発掘用具運搬。県有地境界No 331のコンクリート杭を中心に，10m×2.5mのトレンチを側溝に平行して設定。長軸を２m毎に区切り５区分する。地籍は，鹿角市十和田草木字小坂９の１番地である。

表土はブルドーザーにより除土されているので，大湯浮石層の面まで，平均的に削平する。大湯浮石層の堆積がみられず，攪乱がはげしい。このため，任意の基準面を水糸で張り削土面より40cmまでの深さを第Ⅰ層と仮称する。以下10cm毎にａ～ｘ層とした。

表土より－10cmで全区に土器破片出土する。小破片であり，完全に浮いた状態である。まとまりがない。第Ⅲ区に小型石斧の破片出土。石のみと思われる石器が同時に出土（PL 18上）Ⅱ区に石匙出土（PL 17下）（Fig 17(a)の８）。Ⅳ区に勾台風土器底部（第２層西壁に近く），Ⅴ区に石鏃出土。Ⅳ区～Ⅴ区には，底部のみの出土が多い。

9月15日（日）　晴

Ⅴ区西南壁に大湯浮石層の堆積が出現。西壁を移植べらでカットしながら追跡。Ⅲ区には，かすかに判別できる程度（PL 18の下）。東側は，前年度の法面工事のために盛土してあり，破壊が激しく不明である。

Ⅴ区の浮石層の状態から，西側にのみ若干残っているのではないか。？Ⅳ区西側に，粘質土出現（PL 21上）。土器破片の出土多し。大湯浮石層の下面に水糸を張り，以後の出土は水糸面を基準に

(1)前掲調査報告書

深さを記録する。粘土質まで堀り下げて作業終了。

9月16日（月）　曇のち小雨

Ⅳ区大湯浮石層の－10～13cmに，木炭片と土器破片散布状に出土。Ⅲ区東寄りに粘質土が出現。Ⅳ区とともに，黒色土のみ堀り下げる。Ⅳ区東壁に近く枯葉，杉の葉が出現。一同ガッカリする。攪乱された跡歴然。全区を平均的に削平。

Ⅳ区の粘土質を除去。礫（拳大）と土器片が混在して出土する。Ⅱ区東側に，比較的まとまった状態で土器出土。Ⅳ区に注口土器出土（PL 23の上）。礫に囲われた様な状態であり，中央部より東側は，黒土が深くなっている。表土より－60～70cmに，長方形の角礫が出土。生活文化面を考えさせる。

Ⅴ区中央に，土器が重ねられている状態で出土。（PL 24の上）完形土器（PL 21の下）及び耳飾状土製品が出土。中央付近の出土状態は，数個が重積しているように感じられる。

Ⅱ区とⅢ区の中間に，比較的大形破片出土（PL 22の下）。Ⅲ区中央北寄りに，オカラのような灰の塊が出土した。性格については不明。土器と礫との混在している付近には，木炭片多く散在している。

全面的に堀り下げる。Ⅱ区中央に完形注口土器出土（PL 19）。Ⅱ区北東隅に，大型深鉢と思われる破片出土（PL 17の上）。測量及び土層図を作成の上作業終了。

9月17日（火）　晴

埋戻し作業。

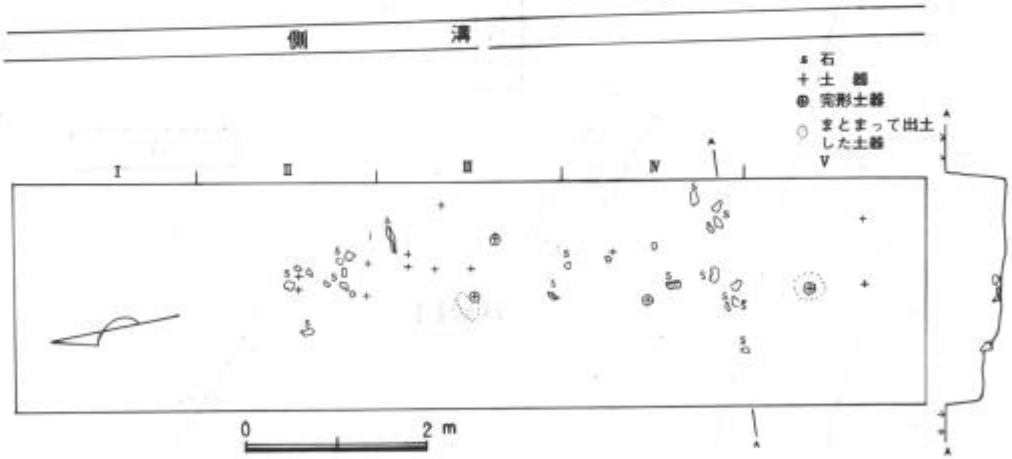


Fig 4　トレンチ実測図（A地点）

2　B地点（Fig 2・Fig 5）（PL25(a)(b)）

鹿角大規模農道の予定路線の中で，最後までとり残された地区は，大湯環状列石の位置する「風張台地」であった。今回の調査の段階でも，まだ正式に路線の決定はみられなかったし，当然土地の買収も終っていなかった。ただ，三本の予定路線が地図の上に線引されていた。したがって調査は，最も可能性のある部分を選定して実施せざるを得なかった。

発掘調査地は，鹿角市十和田大湯字一本木平 116である。大湯環状列石より北東に 700mの休耕地であり，その面積は，約 100㎡である（PL25上）。調査は，昭和49年 9月21～9月24日，10月10日の4日間であり，任意の方向にトレンチを設定した。各トレンチともに，一片の土器片も出土せず，遺構の検出もみられなかった。特にCトレンチでは，大湯浮石層はなく，表土から－20cmで下位火山灰に達した（PL25(a)下）。Bトレンチには，東半に大湯浮石層が約15cmの厚さに堆積され，ある種の期待を抱かせたが，下位火山灰層まで約1mを計りながら，他と同様に遺物の出土はなかった。（PL25(b)）

接近した地点でありながら，大湯浮石層の堆積の有無がみられることは，大湯環状列石発見の端初となった開田事業，及びその後の耕地整理等により，当該地点は，原地形とまったく変り，ある部分では（Cトレンチも含めて）削平・攪乱の大規模だったことを示すものと思う。

調査終了後数日して，正式路線決定の報に接した。それは調査地点の北方約 150mを通過することだった。

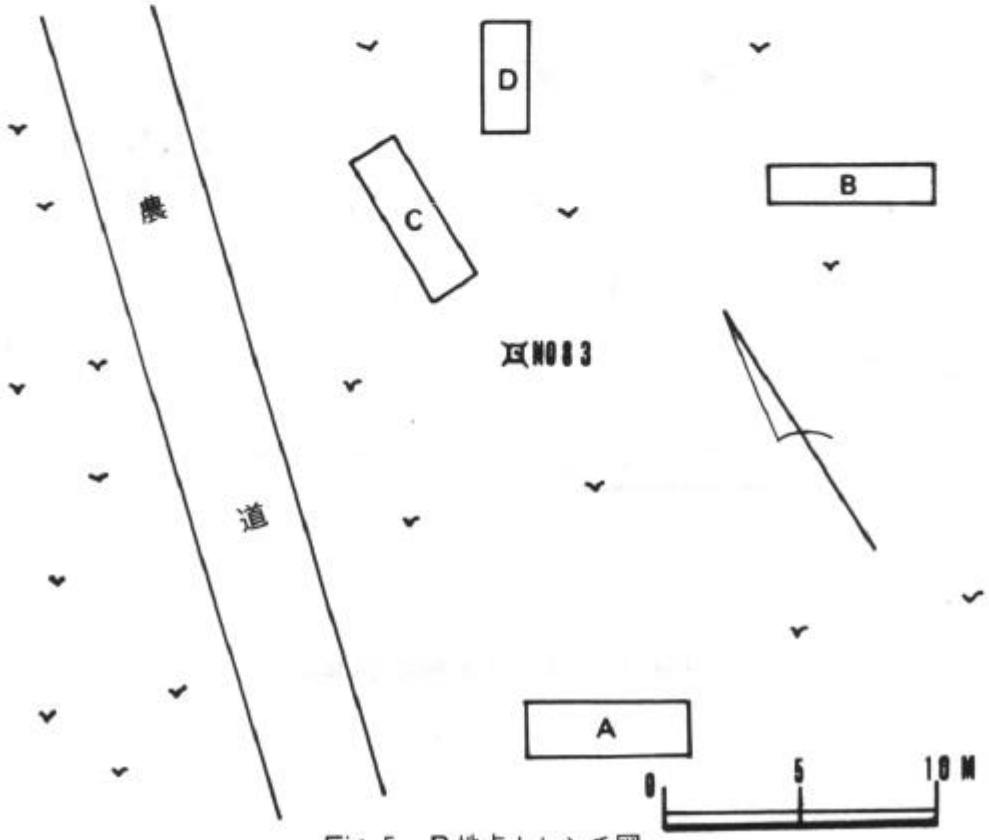


Fig 5　B地点トレンチ図

Ⅳ　出　土　遺　物

遺物は，土器が主であり，すべてA地点からの出土である。その量は，昭和48年の採集分も合せて，リンゴ箱5個程であった。ここには，その代表的なものをのせるにすぎない。

器形は，深鉢・鉢・浅鉢・勾台付皿・壷・注口土器等であり，深鉢・鉢・壷は，胴上部から口頸部にかけて，縄文のみのもの（粗製土器）や，磨消縄文，沈線による入組文，列点・刻み目による凝縄文等の文様帯が発達している。皿・浅鉢・注口土器は，磨研された無文のものが多く，皿・浅鉢は，ゆるやかな波状口縁が主である。注口土器には，長頸と短頸のものがあり，頸部は前者が直立，後者は「く」の字形に外反するものが多い。胴部は球形で，小さな丸い低い台が貼り付けられている。深鉢，鉢の口縁部は，平縁，波状，装飾突起がみられ，底は，揚底・小勾台風のものが多い。また土器面には，酸化鉄が付着し，土器全体がボロボロにもろくなっているのが多かった。

1　完形・復元土器（Fig 6(a)(b)）（PL 2・3）

Fig 6(a) とFig 6(b) は，完型または大部分を残す土器である。

Fig 6(a) の1・2・4は，注口土器である。

1は，ヘラ状工具で磨研され，口縁貼り付け部及び胴部に，各1条の沈線がめぐらされている。口径8.8cm, 胴径13.0cm，器高14.8cm。色沢は灰黒色。

2も1と同様磨研され，口縁貼り付け部及び胴上部に各1条の沈線がめぐらされている。底部には，貼り付け小勾台がみられる。口径 9.6cm，胴径14.8cm，底径 3.0cm，器高21.3cm，色沢は灰褐色。

3は台付壷で，表面はへら状工具で磨研されている。口径 6.5cm，胴径12.2cm，底径 5.5cm，器高12.9cm，茶褐色。

4は1・2と同様で，沈線は，口縁貼り付け部だけである。口径 8.0cm，胴径13.0cm，器高13.1cm，黒色である。

Fig 6(b) の1は注口土器で，へら状工具で磨研され，口縁部が大きく外反するものと思われる。口縁貼り付け部，頸部には各1条の沈線がめぐらされ，底部は，Fig 6(a) の2と同様貼り付け小勾台がみられる。口径推定 8.0cm，胴径14.2cm，底径 2.0cm，推定器高16.5cm，色沢灰白色。

2は勾台付皿で，内外面ともよく磨研され，台部には1個の小孔がうがたれている。口径12.5cm 底径 6.2cm，器高 5.3cm，灰白色。

3は台付鉢で，口縁に大突起・小突起がみられ，突起上は刻み目があり，大突起は3分，小突起は2分されている。文様は入組文である。口径推定17.0cm，底径 6.3cm，器高17.1cm，灰褐色。

4は揚底の壷で，斜縄文が施され，底縁部は擦り消されている。推定口径 5.7cm，器高推定11.5cm。

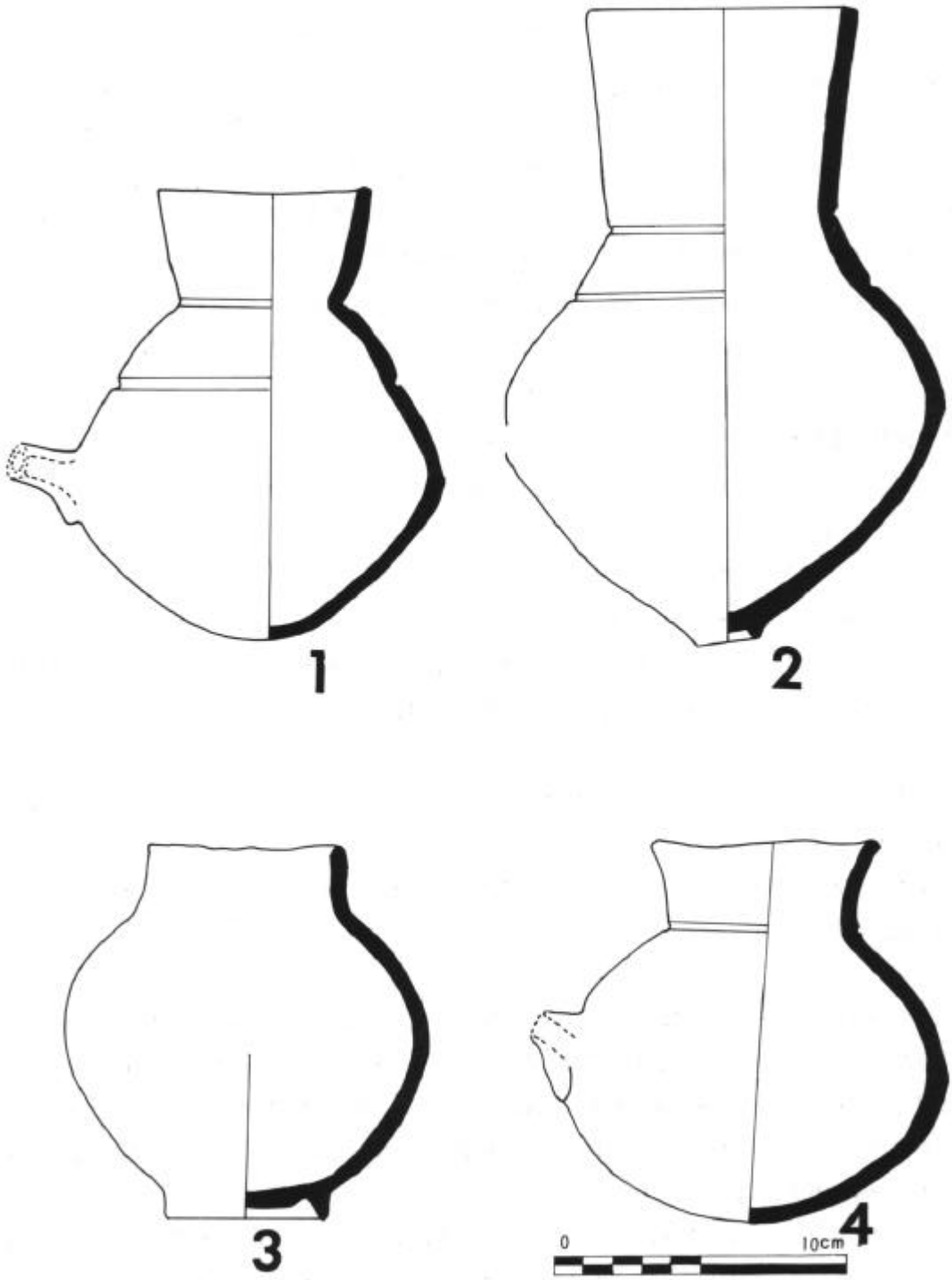


Fig 6　〔a〕完形・復元土器実測図

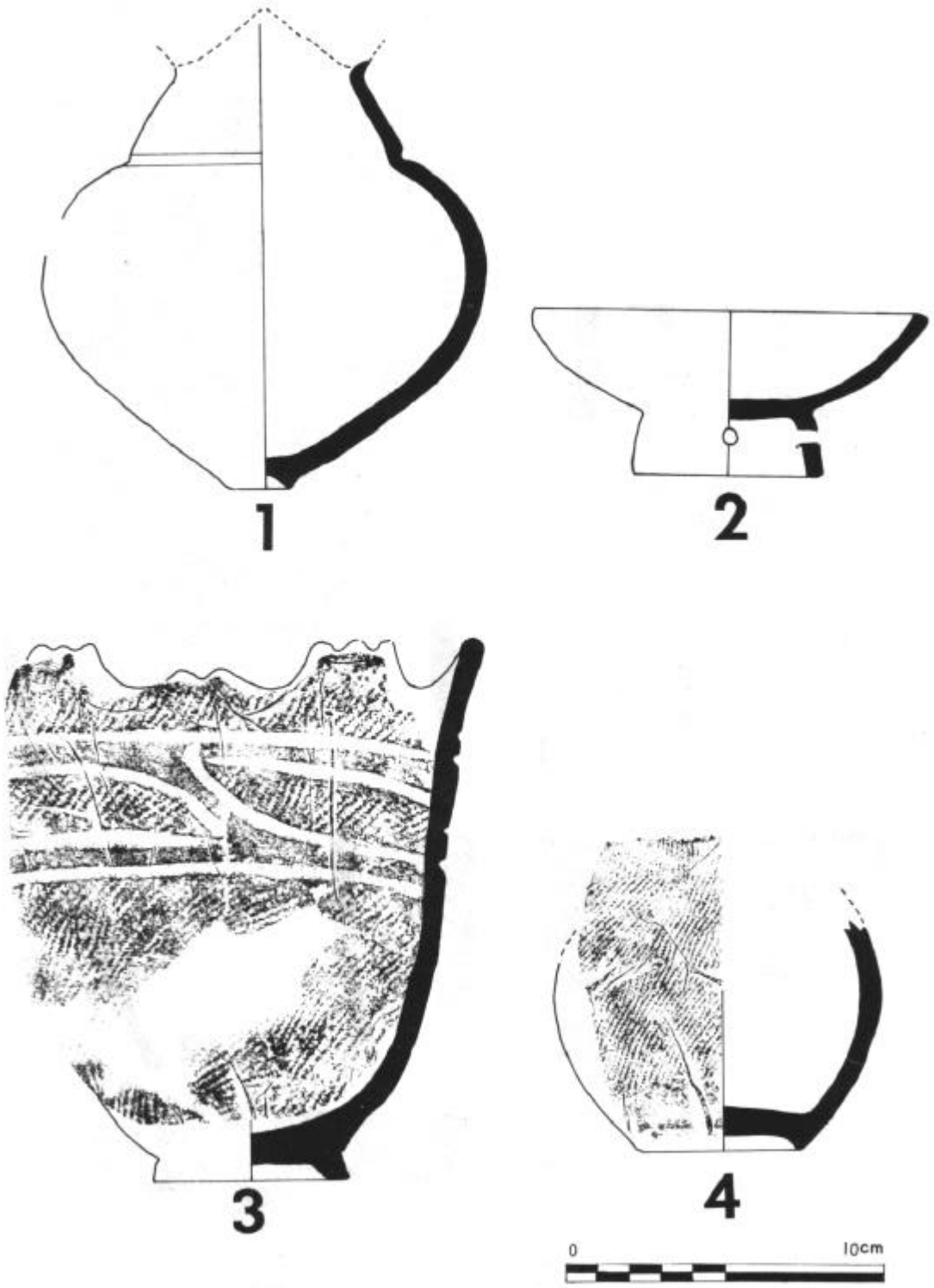


Fig 6　〔b〕完形・復元土器実測図

2　土器破片（Fig 7(a) ～Fig 14）（PL 4(a) ～11）

第1種土器（Fig 7(a)(b)・PL 4(a)(b)）

器形は深鉢及び大型壺で，器表面に縄文のみを施文するもの。

1は頸部が直立し，肩部が大きく張り出した大型壺。3・4は，ゆるやかな波状口縁で，その他は平縁である。12は結束されない原体による羽状縄文を施したものである。

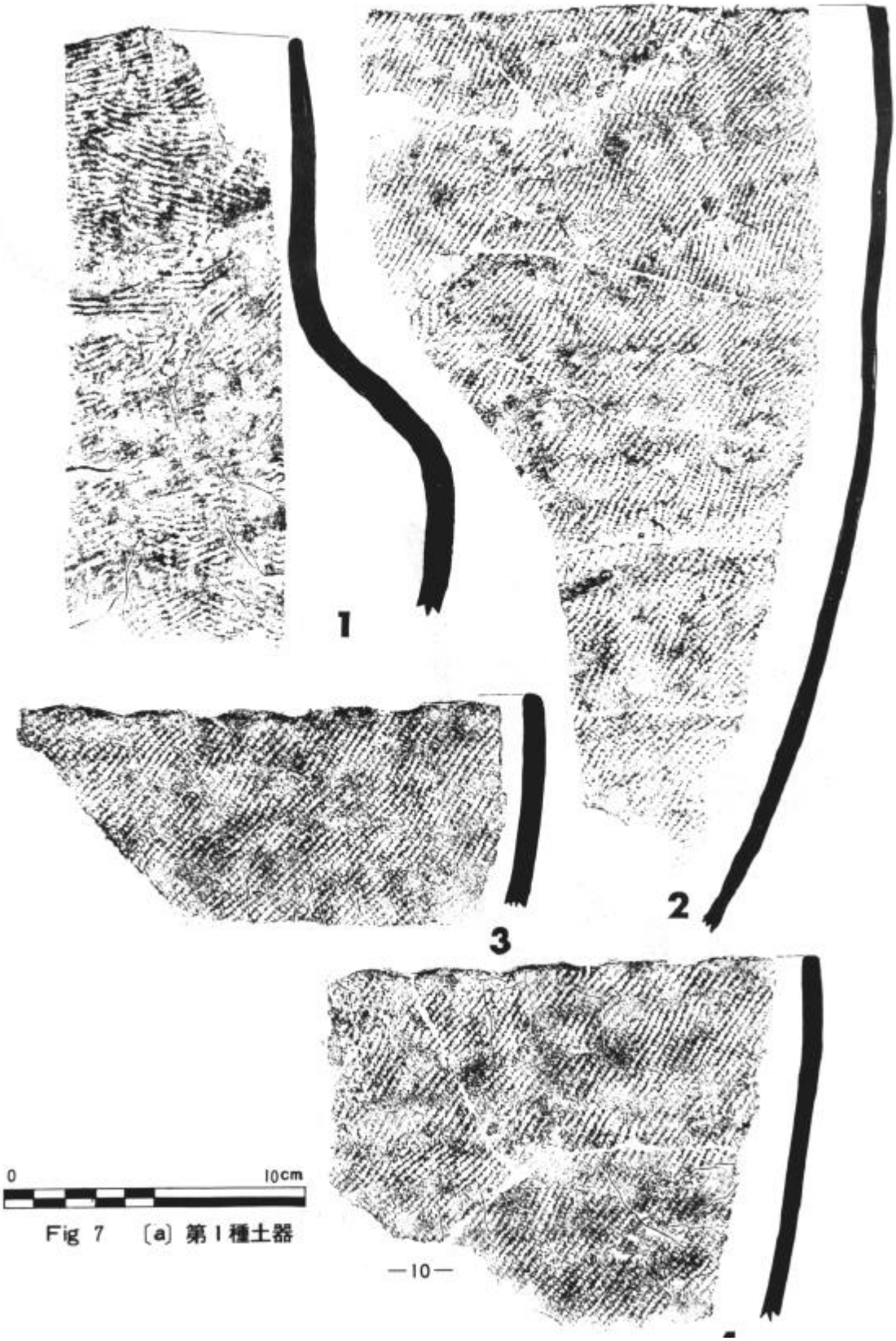


Fig 7　〔a〕第1種土器

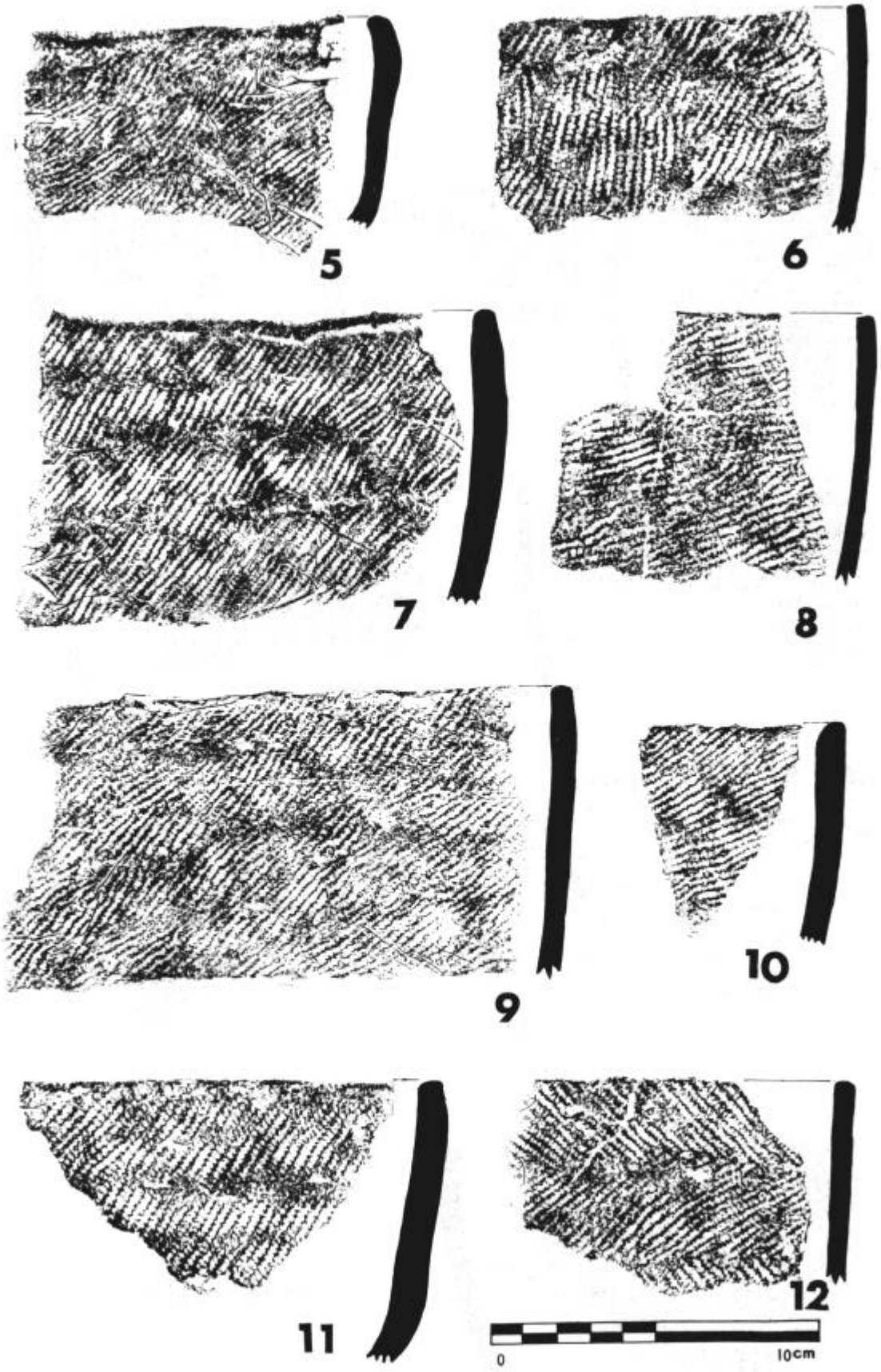


Fig 7　〔b〕第Ⅰ種土器

第2種土器（Fig 8）（PL 5）

無文の深鉢及び浅鉢である。

1は口縁部が直立した深鉢で，他は浅鉢である。5・6・7・8は波状口縁である。

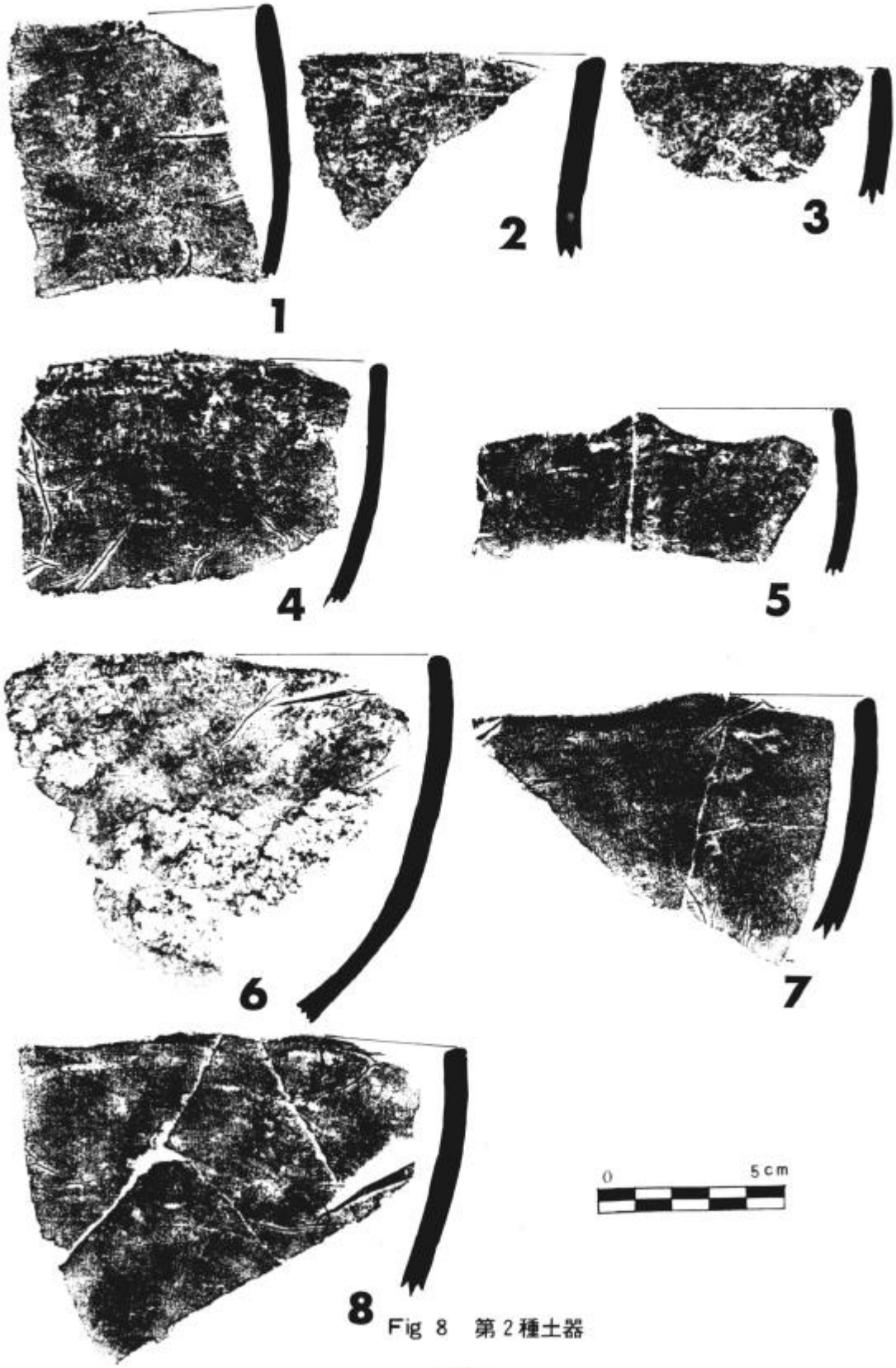


Fig 8　第2種土器

第3種土器（Fig 9）（PL 6）

器形は深鉢及び鉢である。平行沈線を主とするもの。1・2・3・4は，口縁上部を擦り消している。5・7・10は，2条の沈線をめぐらし，その間を擦り消している。6・13は沈線がみられないもの。8・9は，4～6条の沈線をめぐらし，その間を擦り消して，縄文を交互に施文しているもの。11・12は縄文施文後に沈線をめぐらしているもの。14は，山形突起をもち口縁突起下に2条の沈線が孤状に施されている。口縁上部には2条の沈線がめぐらされ，その間は擦り消されている。15は波状口縁で，沈線により画される口縁上部は，擦り消されている。なお，3・7・8・12は波状口縁である。

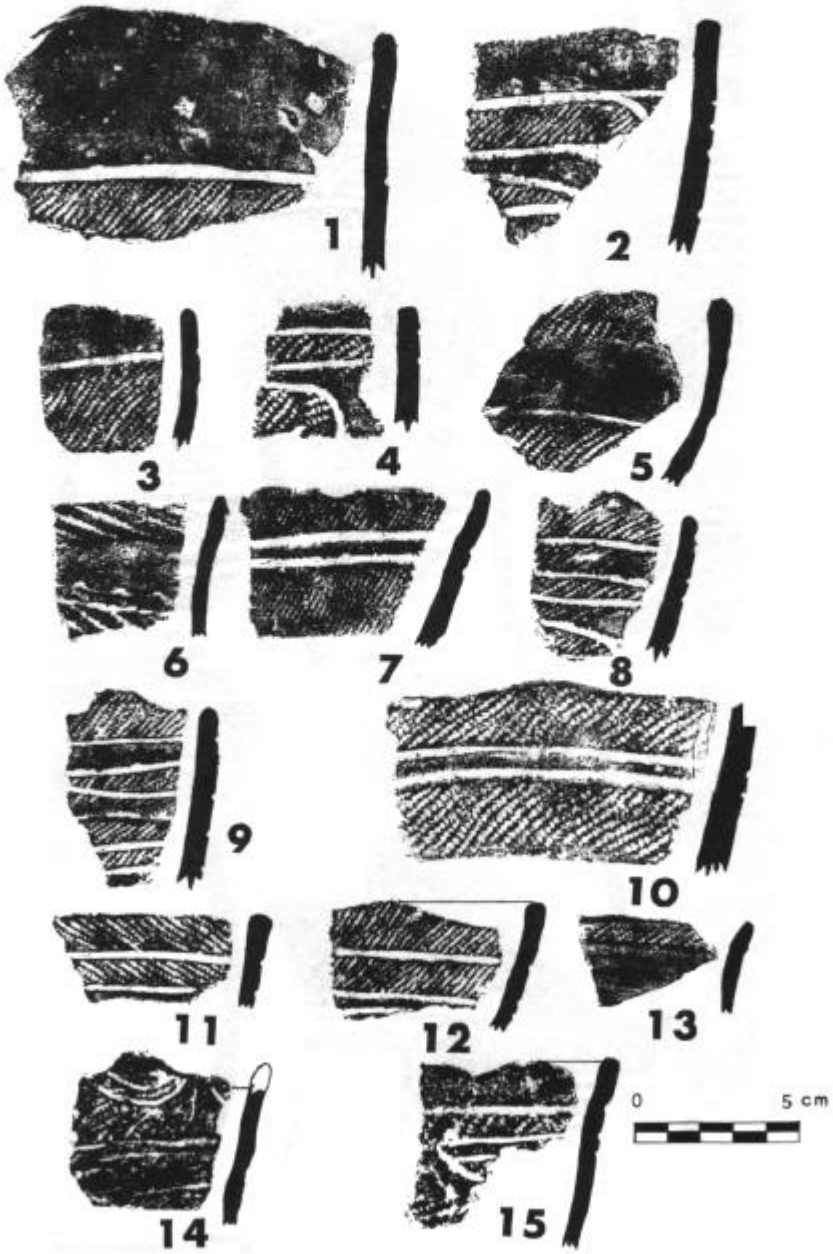


Fig 9　第3種土器

第4種土器（Fig 10）（PL 7）

器形は大部分が鉢形土器である。口縁は，いずれも波状口縁で，器面は大部分が入組文である。

5・6・7は，平行沈線間に列線がみられる。

10は入組結節部に，イボ状小突起がみられる。

9は，5，6，7同様の列線と10同様のイボ状がみられ，さらに三叉文を有する。

11は口縁上部を擦り消し，口頸部の文様帯接合部に，倒立，直立の三叉文を有する。

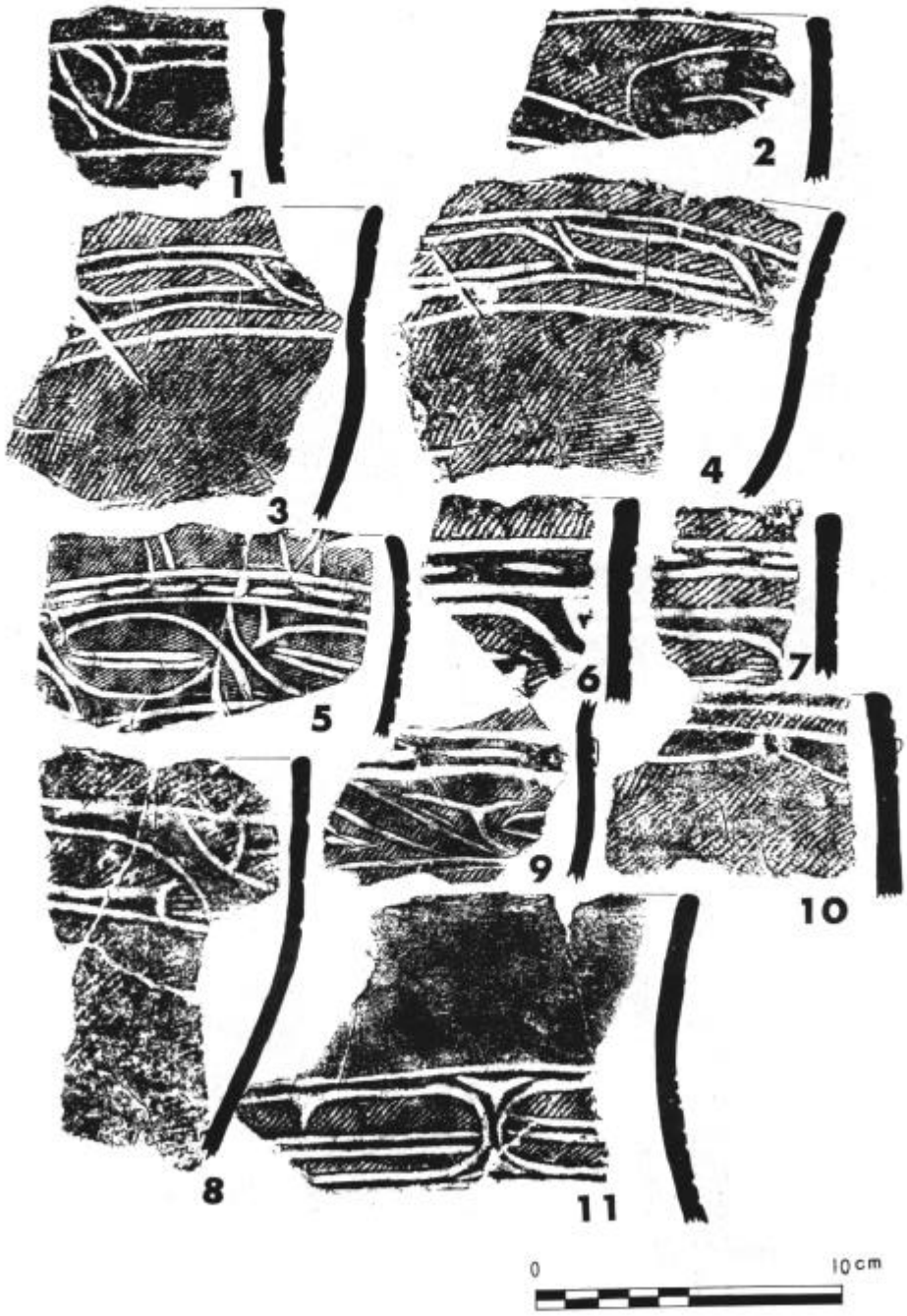


Fig 10　第4種土器

第5種土器（Fig 11）（PL 8）

器形は，深鉢及び鉢で，前種と同様入組文を主とする。

2・4は，口縁に突起をもつ。4の頸部たちあがり部分には，列線がめぐらされている。

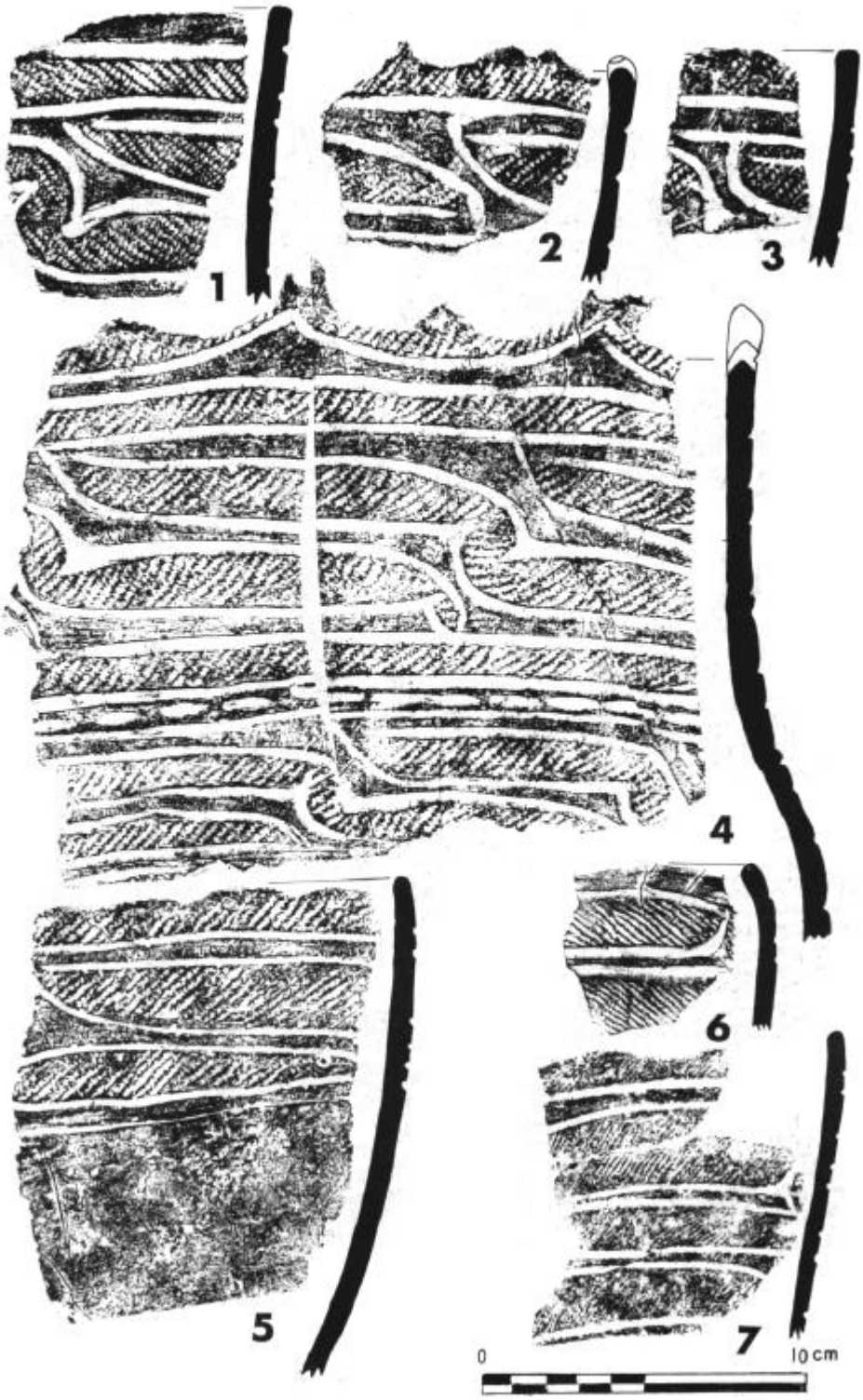


Fig 11　第5種土器

第6種土器（Fig 12）（PL 9）

文様は入組文を主とし，口縁に大突起と小突起がみられ，大突起には刻み目が入り，2～3に分けられている。

11は，大突起下に張り瘤がみられ，刻み目が入り2分されている。

9・12の大突起下には，沈線が施こされ，突起部と区別されている。

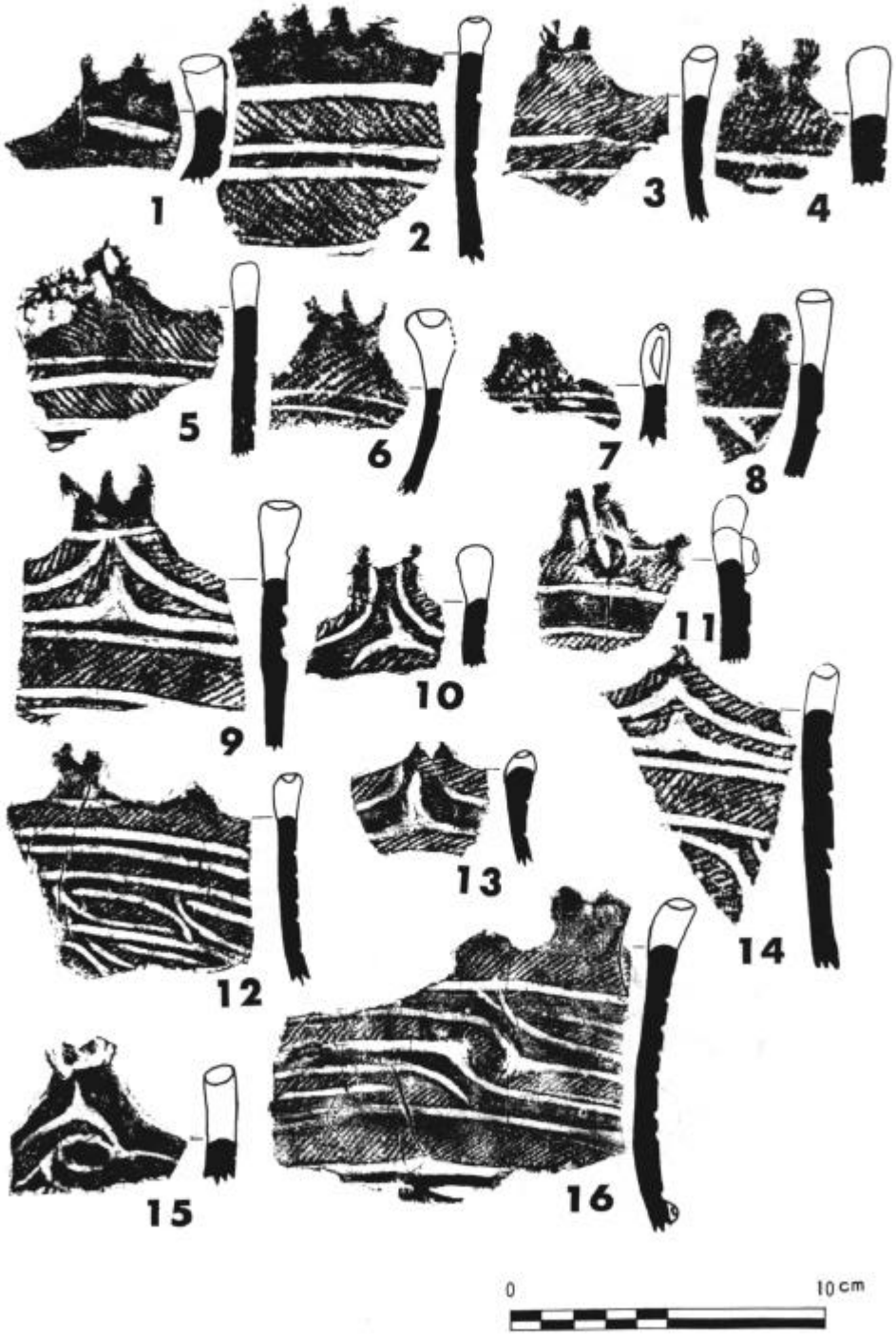


Fig 12　第6種土器

第7種土器（Fig 13）（PL10）

沈線，列線，刻み目による凝縄文を主文様とする。

1・12・15・16・17・18は，口縁部に突起がみられ，刻み目により2分されている。

3は，口唇にも刻み目がみられる。

7・10の口縁には，イボ状小突起がみられ，刻み目がほどこされ2分されている。

13は入組結節部に，イボ状小突起がみられる。

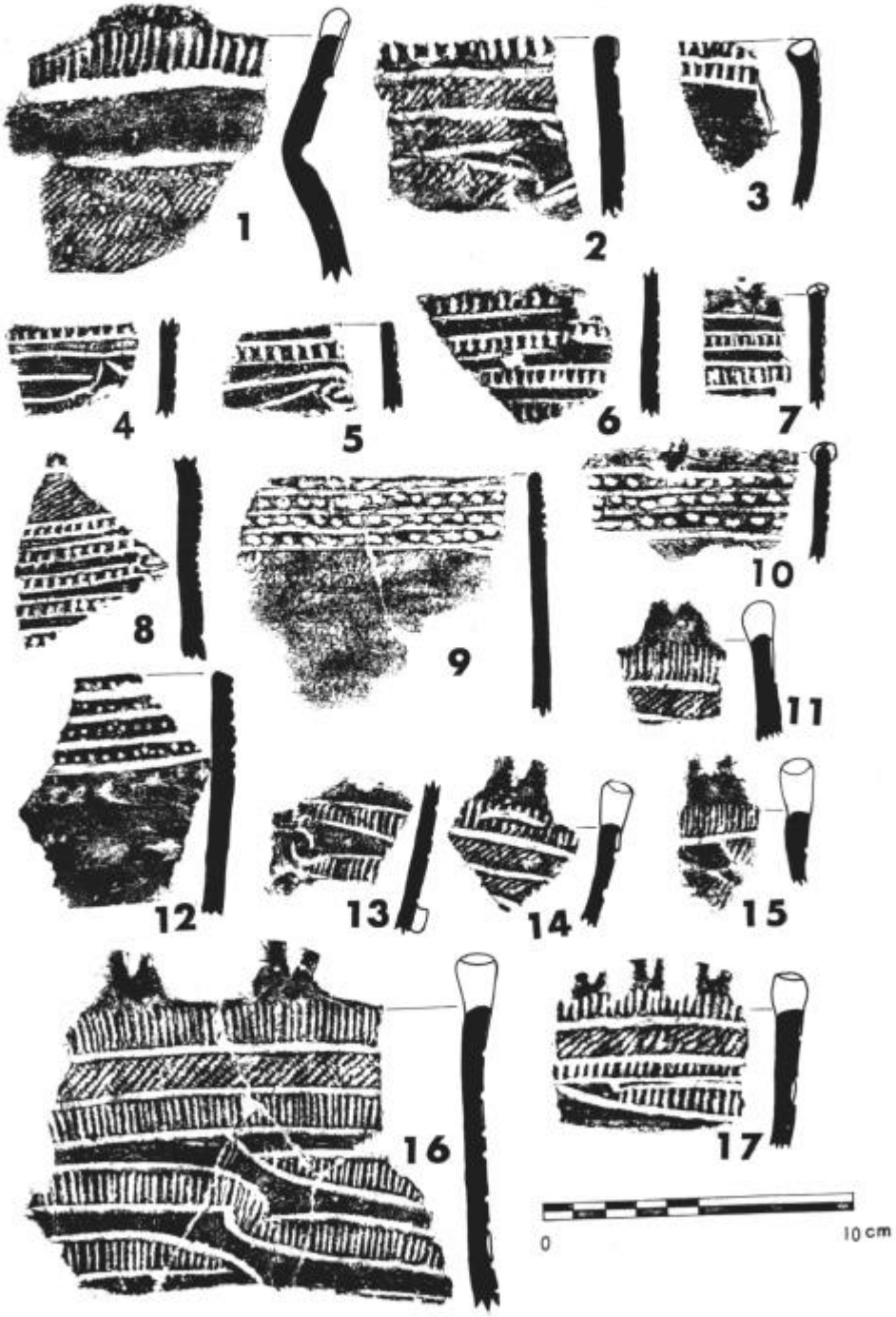


Fig 13　第7種土器

第8種土器（Fig 14）（PL11）

口縁部に三叉文及び沈線波状入組文を有する鉢形土器である。

8は内面口縁上部に，乳頭状突起を有する。

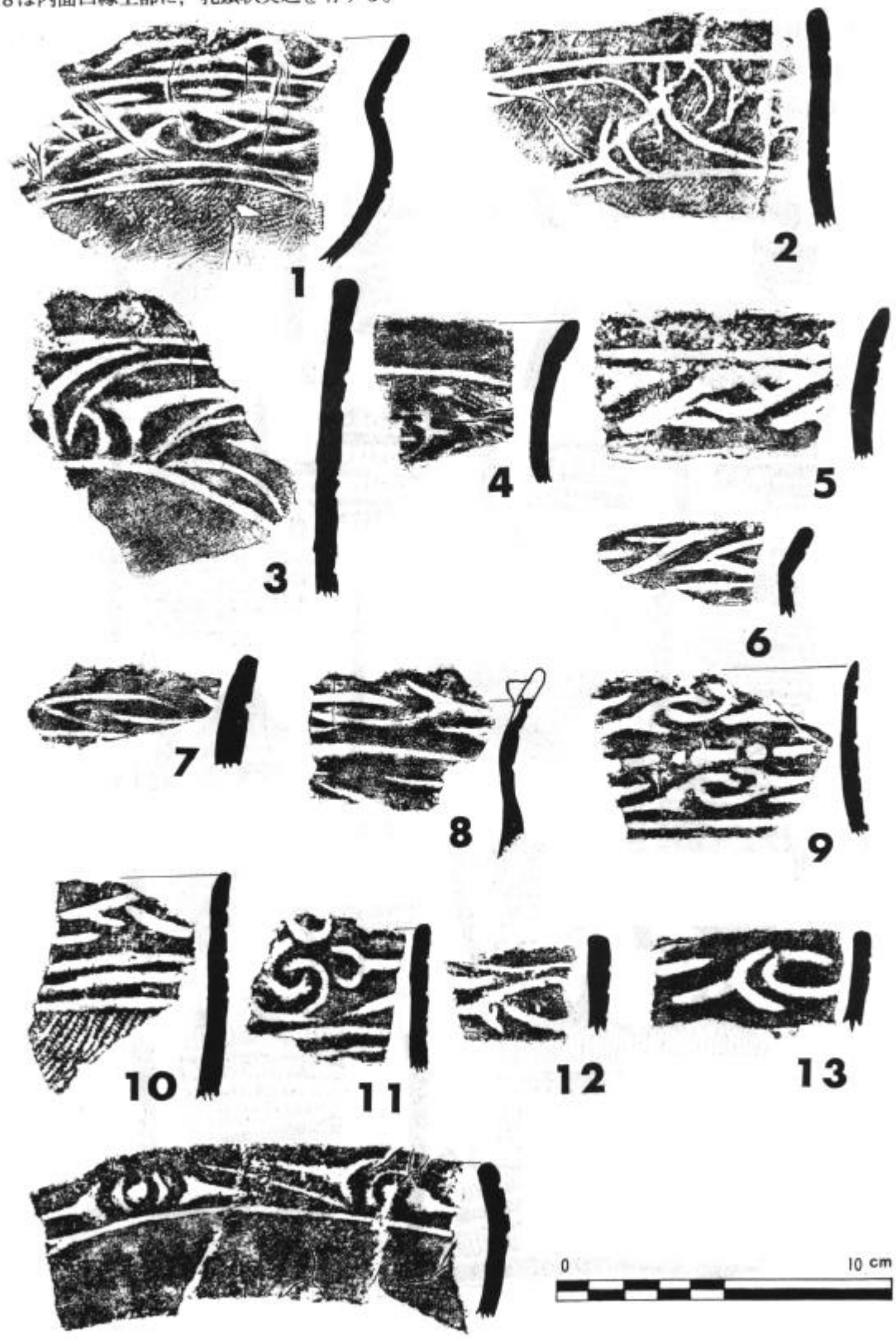


Fig 14　第8種土器

3 底　部　(Fig 15)

1・2・3は台付皿と思われ，4は台付壺であろう。勾台風である。1・4の台貼付部には，沈線が1条めぐらされる。

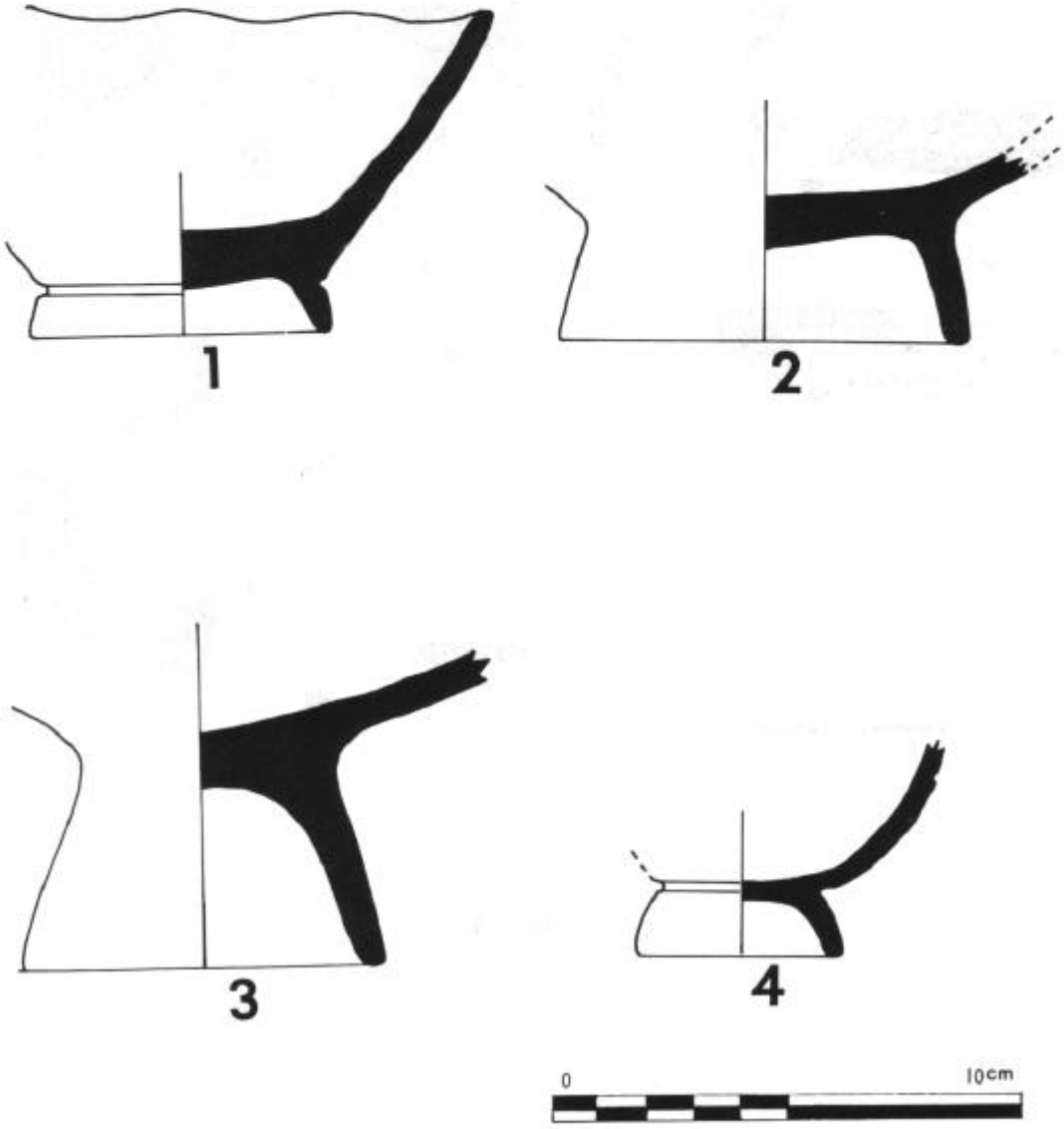


Fig 15　土器底部実測図

4 土 製 品 (Fig 16) (PL 12)

Fig 16は土製品である。

1・3は，あるいは土器の突起かもしれない。

2・4は耳飾りで，2は耳栓，4は玦状耳飾と思われ，一面に玉抱三叉文が施文されている。

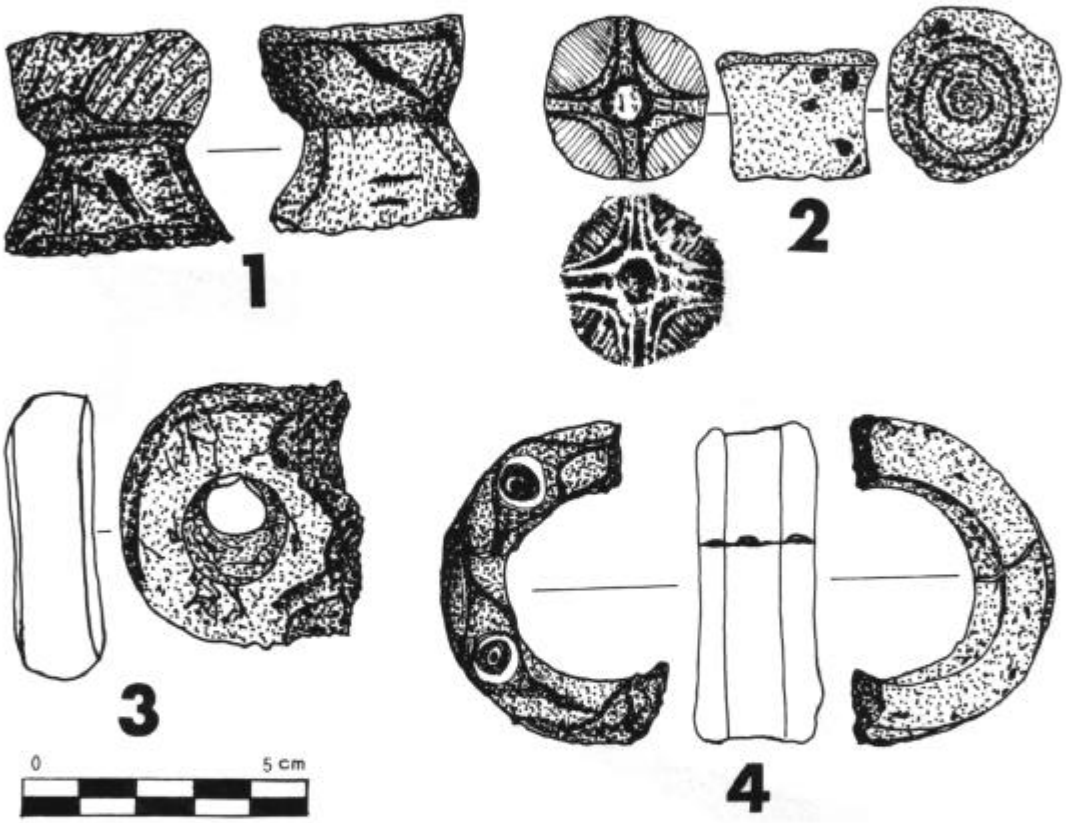


Fig 16 土製品実測図

5 石　器　（Fig 17(a)(b)）（PL12・13）

石鏃（Fig 17(a) の 1 ・ 2 ）（PL12）

ともに硅質頁岩製の凸基の石鏃である。

1は両端が欠損しているが，無茎で，いわゆる柳葉形を呈する。2は有茎である。両者ともに基部周辺に，アスファルトと思われるものが付着している。

石錐（Fig 17(a) の 3 ・ 4 ・ 9 ）（PL12）

ともに硅質頁岩製の石錐である。3は，やや小型であるが，先端部に使用痕である摩滅部分がみられる。4も先端部が大分摩滅しており，使用度がうかがえる。両者ともに，先端部の断面は，三角形を呈する。9は，その大部分に，原石からの剥離面を残しており，先端部周辺に，わずかに調整が成されているのみである。また，先端部には，アスファルトと思われるものが付着している。

石匙（Fig 17(a) の 5 ・ 6 ・ 7 ・ 8 Fig 17(b) の 7 ）（PL 12・13）

すべて硅質頁岩製の石匙である。Fig 17(a) の 5 ・ 6 ・ Fig 17(b) の 7 は，いわゆる縦型の石匙で，Fig 17(a) の 5 ・ 6 は，両面からの調整により，ていねいなノッチを入れ，つまみを付しているが，Fig 17(b) の 7 は，片面からの調整で，しかも一方からの浅いノッチのみで，つまみらしいものは明瞭でない。Fig 17(a) の 6 ・ Fig 17(b) 7 は，片面にのみ調整が成されているが，Fig 17(a) の5は一側辺ではあるが，両面加工により刃部が形成されている。Fig 17(a) の 6のノッチ周辺には，アスファルトと思われるものが付着している。

Fig 17(a) の 7 ・ 8は，いわゆる横型の石匙である。ともに両面からの調整により，ていねいなノッチが入れられ，つまみが付されている。刃部は，片面からの調整のみで形成されている。

不定形打製石器（Fig 17(a) の10・11・12・13・14）（PL 12）

ともに片面に原石からの剥離面をそのまま残し，あまり調整の成されていない剥片石器である。岩質は10のみチャートで，その他はすべて硅質頁岩である。

磨製石のみ（Fig 17(b) の 1 ・ 2 ）（PL13）

1 ・ 2ともに片岩製の石のみである。1は長さ約17.5cm，2は約18cmを計る。両者ともに，研磨の到らなかった部分があったのか，あるいは破損後も，その部分を研磨して使用したのか，研磨の及んでいない部分がみられる。また，1のほぼ中央部の周辺に，アスファルトと思われるものが付着している。

小型磨製石斧（Fig 17(b) の 5 ）

蛇紋岩製の小型磨製石斧である。完成品の一部破損したものか，未完成品かはっきりしない。

その他の石器（ Fig 17(b) の 3 ・ 4 ・ 6 ）（PL13）

3 ・ 6ともに，Fig 17(b) の 1 ・ 2 と同様の石のみか，磨製石斧あるいは石刀の類の石器の破片であり，3はよく研磨されており，岩質は石英安山岩である。6は片岩製で，よく研磨されていた痕跡はあるが，かなり風化していて，もろくなっている。

4は，用途不明の片岩製の打製石器で，三辺を打ち欠いて凹部を形成している。おそらく，欠損部にもそれがあり，四辺に凹部を設けたものであろう。

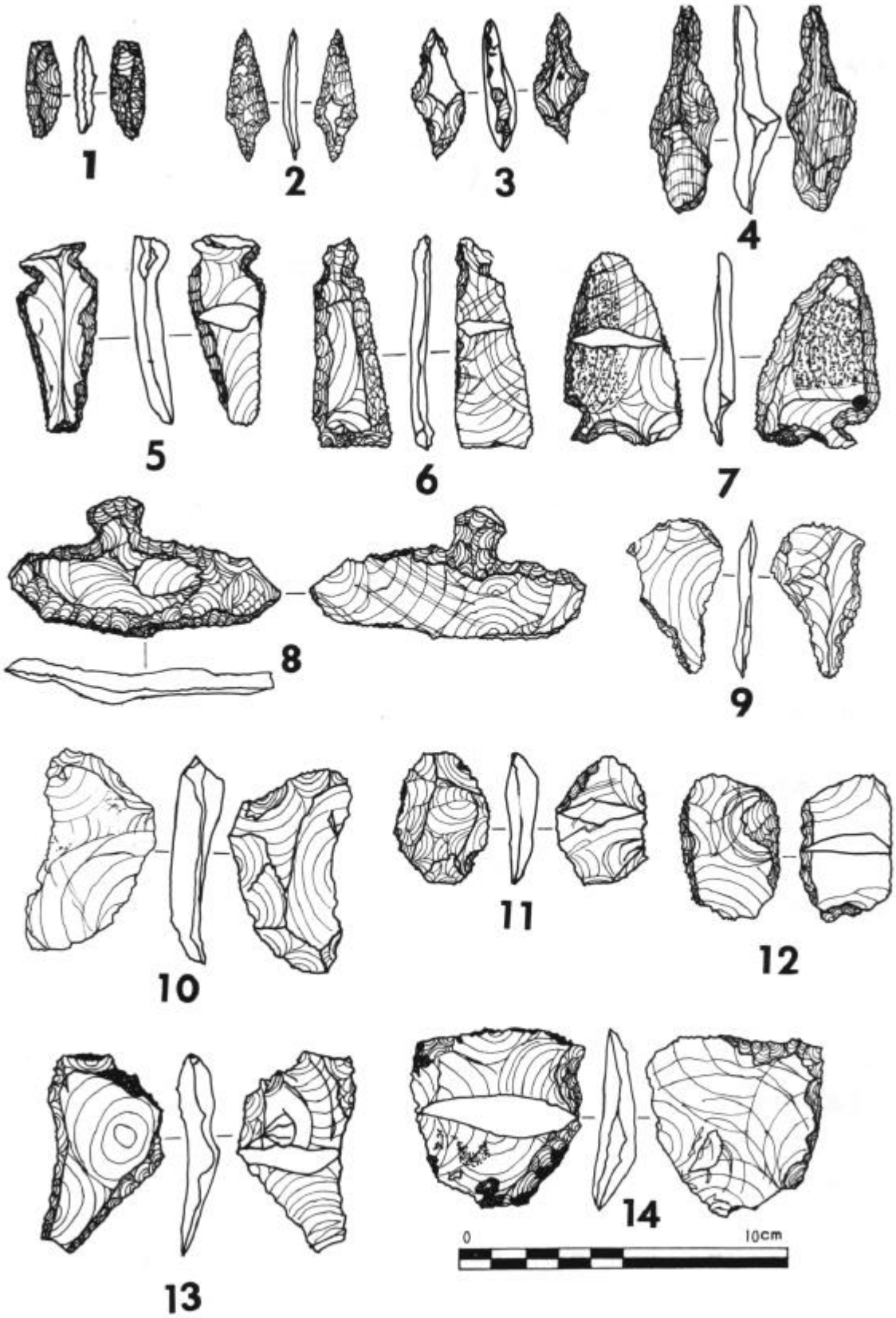


Fig 17　〔a〕石器実測図

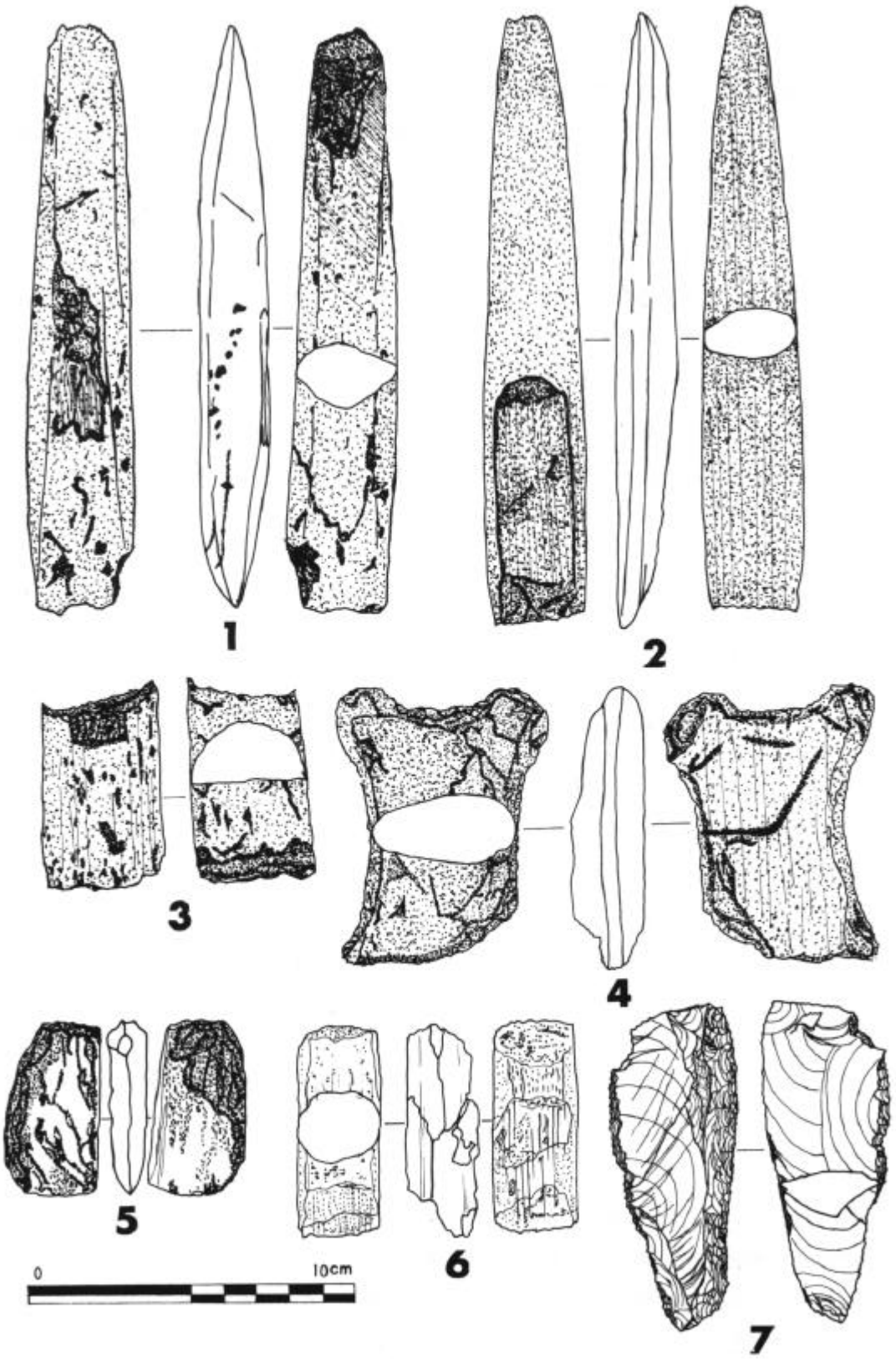


Fig 17　〔b〕石器実測図

V　考　　察

3日間の調査であったが，遺構の性格を確実に断定できるほどの確証は得られなかった。

発堀地は，10m×2．5mのトレンチ1本であり，当地方に於ける通常の縄文期発堀では，大湯浮石層下に，遺物及び遺構が存在するのが普偏的である。このため，浮石層までは積極的に除土を行ない，それを一つの基準として，以下の部分については細心の注意をもって発堀するのであるが，前記のように，トレンチ内の大湯浮石層の存在が不安定なものであった。

後日，付近一帯の踏査と地主の助言を総合して，次のように解釈した。発堀地は，館状遺構の空濠の中の，わずかな高まりのある部分であり，20年程前までは，畑として耕作されていた。当時起耕中に，土器片の出土は，かなり多かったという。以後，付近の水田への客土の必要に迫られ，高まりの大部分は，大量の黒土とともに削平され，10年前に杉を植林したものである。このため，表土付近の撹乱が著しく，大湯浮石層の欠除した部分も多く，その堆積状態も極く薄いものであった。特に道路側（東側）は，法面の盛土もあり，表土より－40cm～50cmまでは，明確に土層を確認することはできなかった。

調査面積は，極く狭いものであったが，トレンチの中央より東側の落ち込みは，わずかなものであったし，これを住居址の周壁と考えられないこともないが，断定することはできない。もし住居址だと仮定すれば，その大半は，法面及び道路敷により破壊されたものと考えたい。柱穴・炉址等の検出も，土器の異状な出土状態もみられなかった。

Ⅵ　総　　括

この発堀調査で出土したA地点の遺物は，縄文後期末葉の宮戸式に類するものであり，一部は，縄文晩期初頭のものも含んでいると考える。秋田県でも，これほどまとまって出土した例はあまりない。

我々は当初，可能な限り分層発堀を目指した。しかし，すでに述べたように，撹乱のはげしい土層状態では，その成果を期待することはできなかった。もし，偶然の発見ではなく，いま少し早く工事着工前に調査できたのであれば，鹿角地方における貴重な成果を上げ得たと思う。

遺構についても，その大半は，すでに破壊ないしは路面下におしつぶされ，調査に協力した高校生の嘆きもまた大きかった。

謝　　辞

末文で恐縮であるが，発堀調査を承諾された柳館正武氏，柳沢康永氏，種々の御教示を頂いた県立博物館の富樫泰時氏，大館市史編纂室の板橋好範氏，県文化課門間光夫先生，発堀員に入浴の便を与えられた大湯温泉馬渕旅館。そして，農作業の途中持参した冷い水を，我々に差し出してくれた十和田高校の男子生徒（失礼だが名前を失念した），社会科同好会の生徒諸君に厚く感謝の意を表します。

参　考　文　献

文化財保護委員会　「大湯町環状列石」　昭和28年

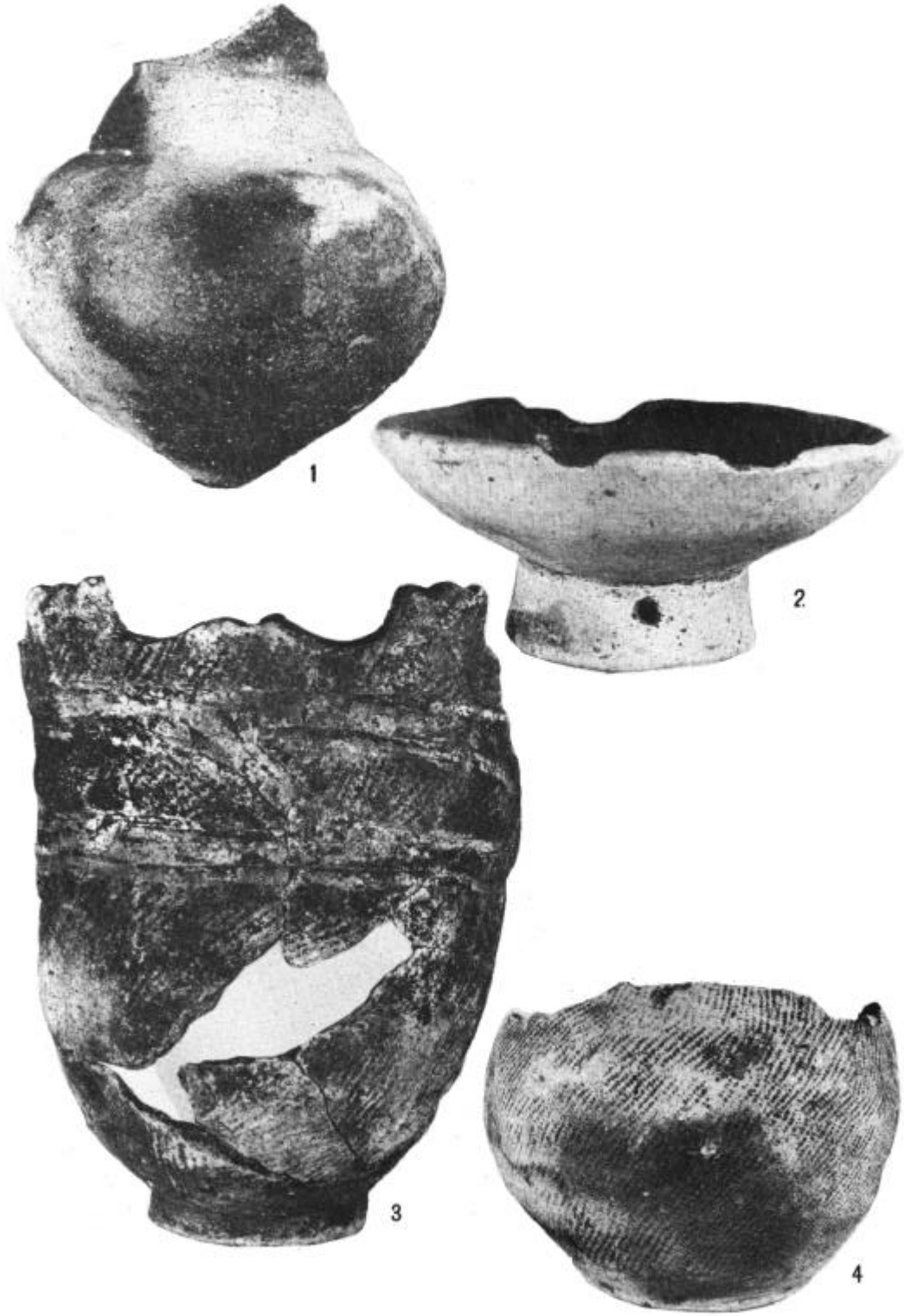
後藤勝彦：「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器編年について」塩釜市教育論文

〃　「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」考古学雑誌48の1

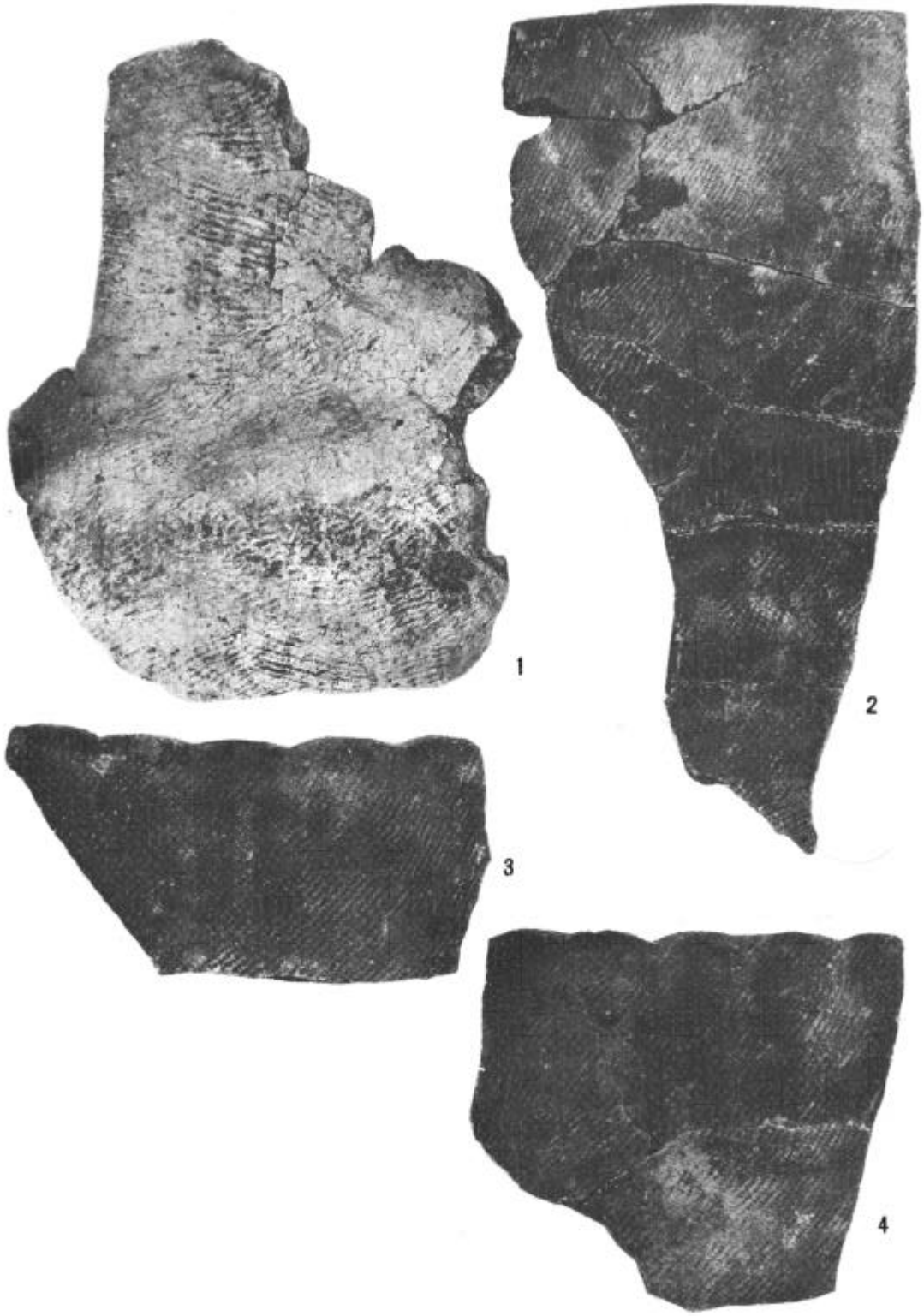
宮城教育大学歴史研究室編：「仙台湾周辺の考古学的研究」1968年

平賀町教育委員会：「石郷遺跡発掘調査概報」1975年

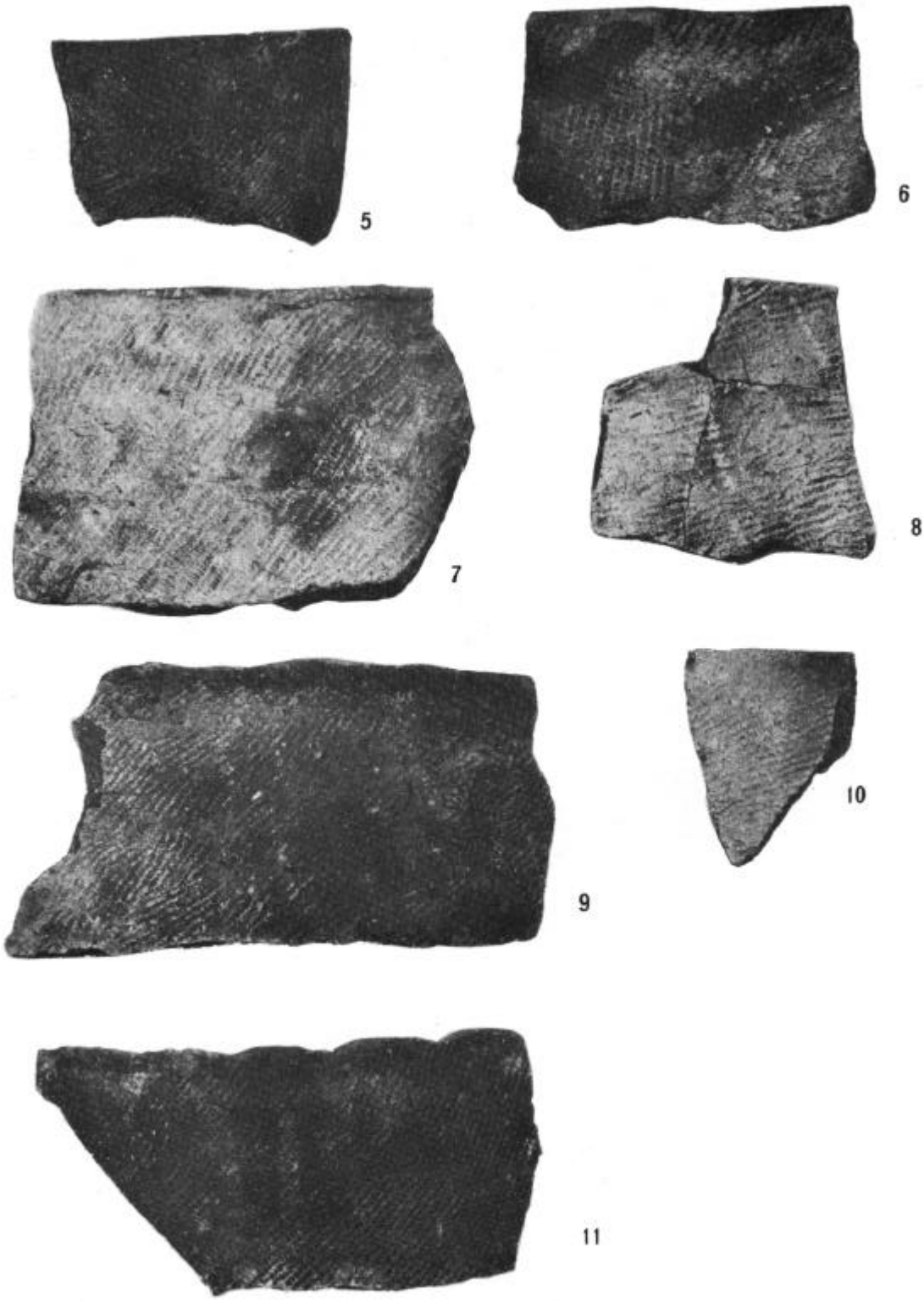
PL 2　完形・復元土器



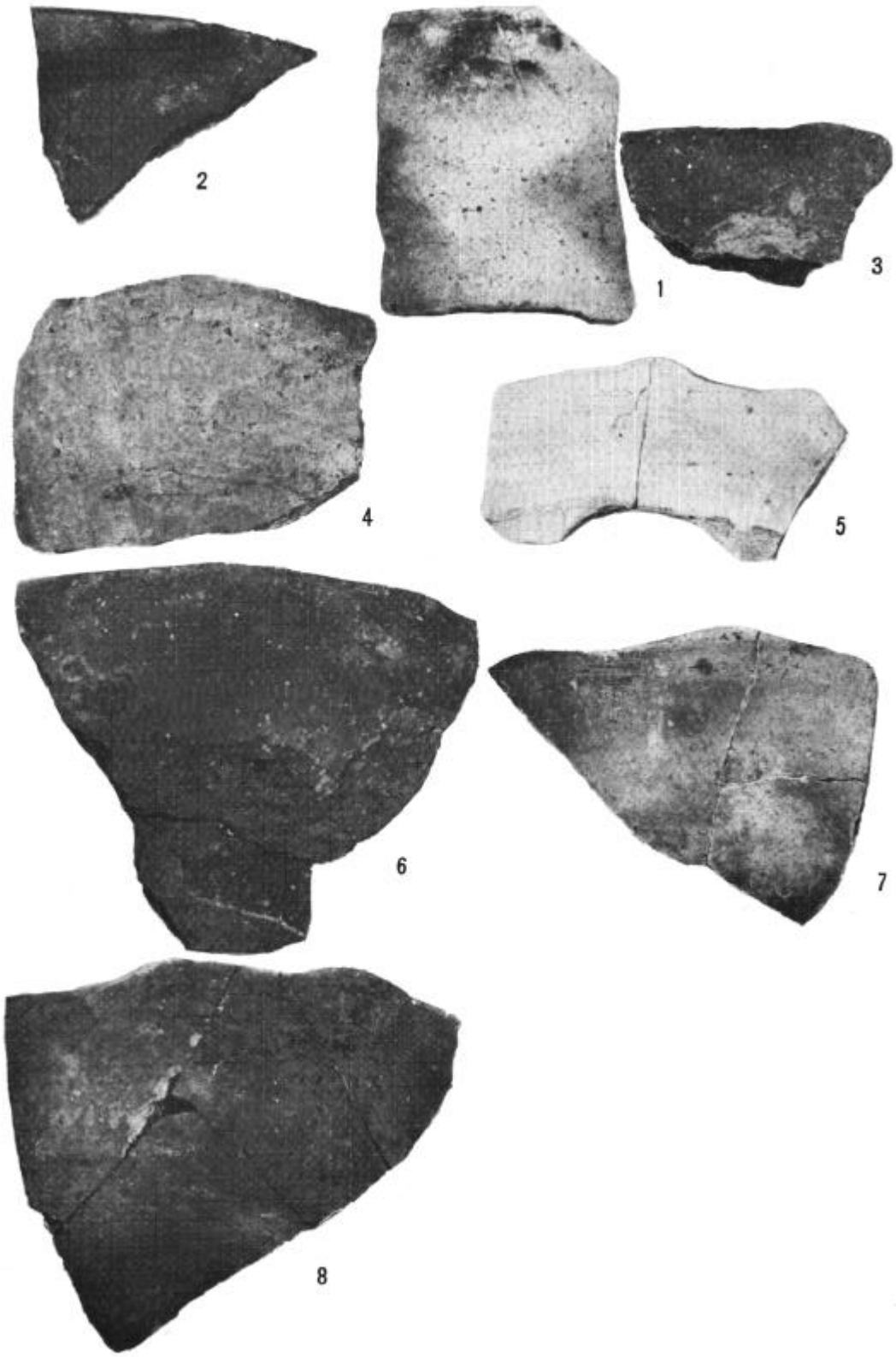
PL 3　完形・復元土器



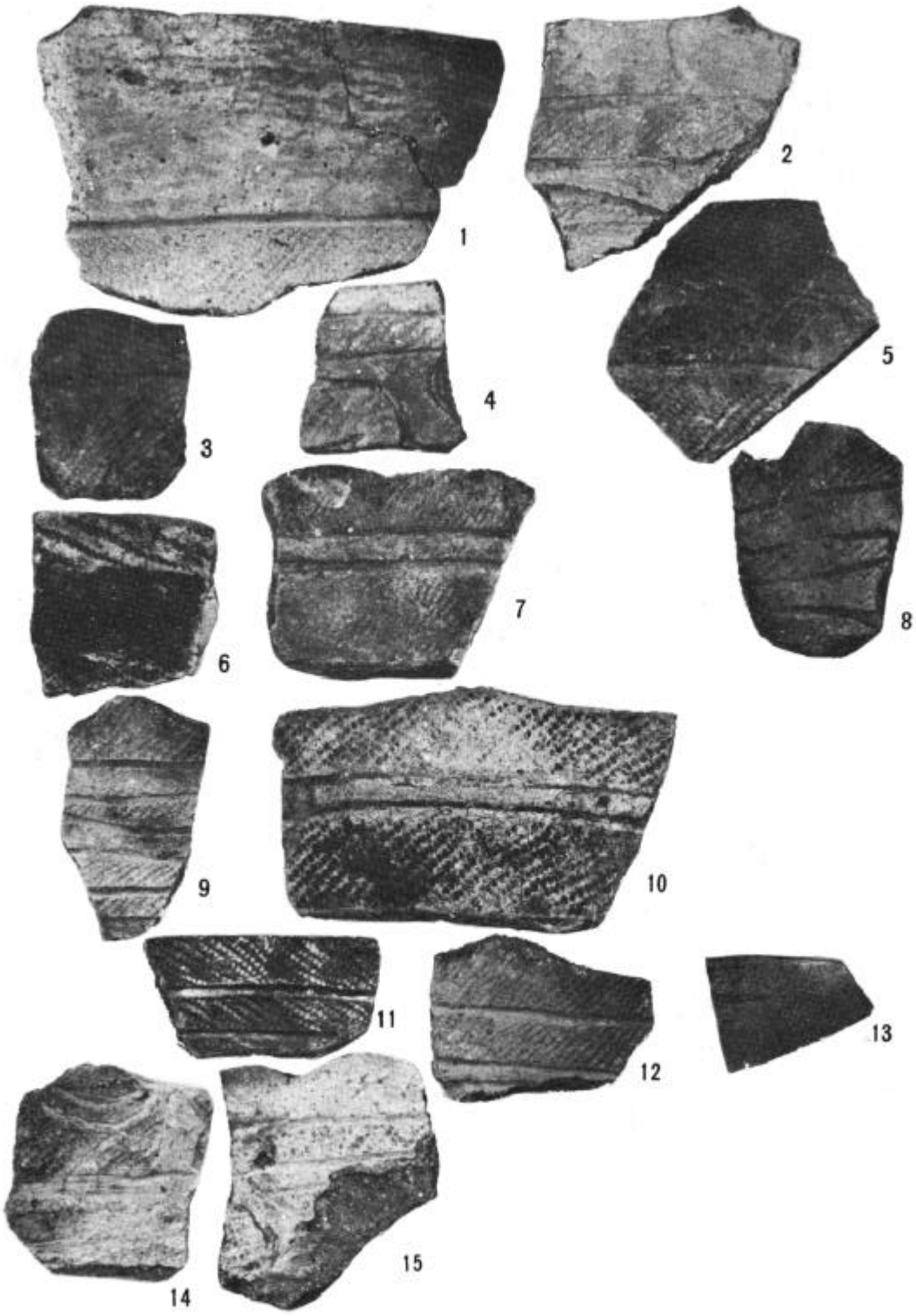
PL 4　〔a〕第Ⅰ種土器



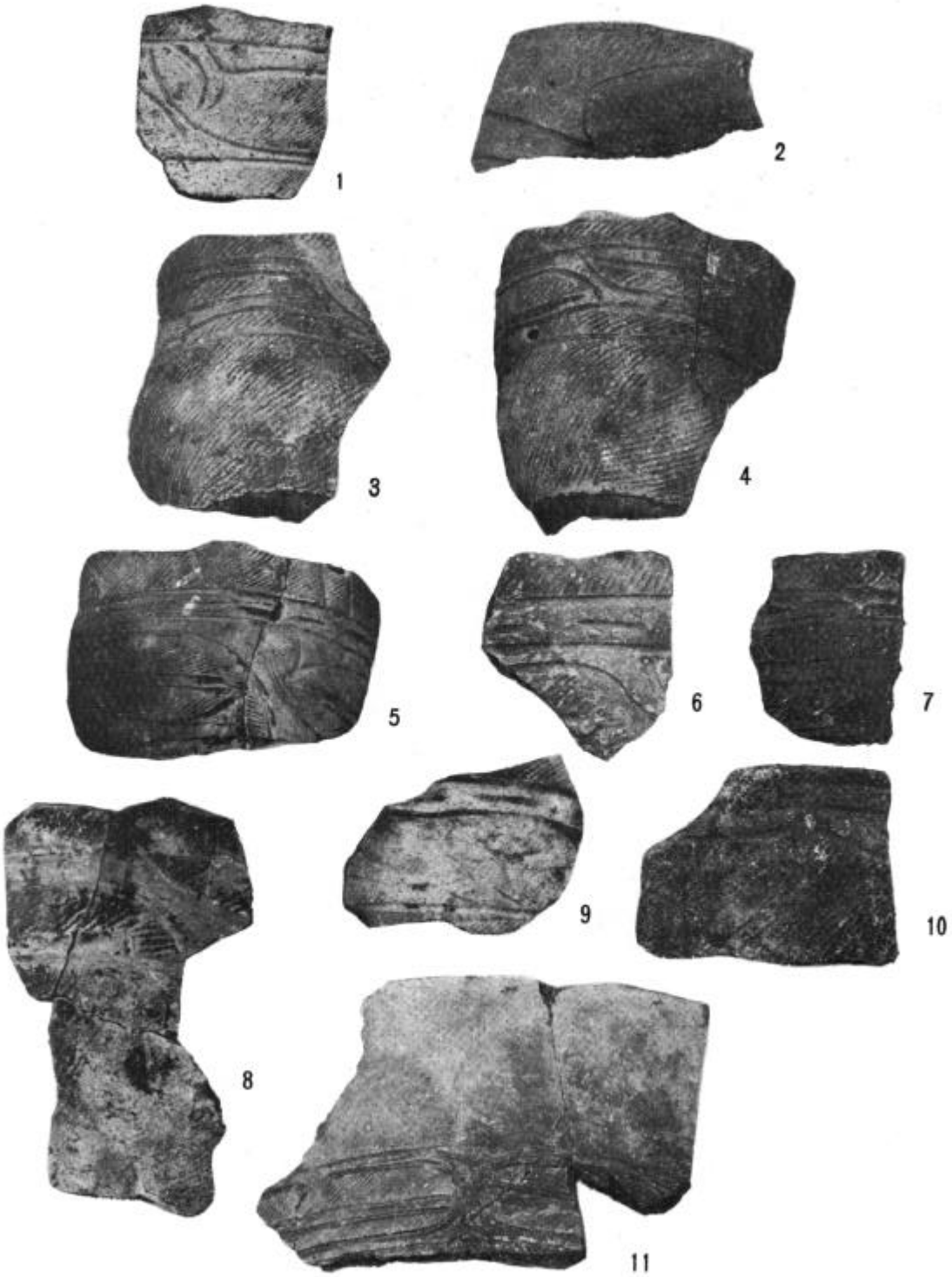
PL 4　〔b〕第Ⅰ種土器



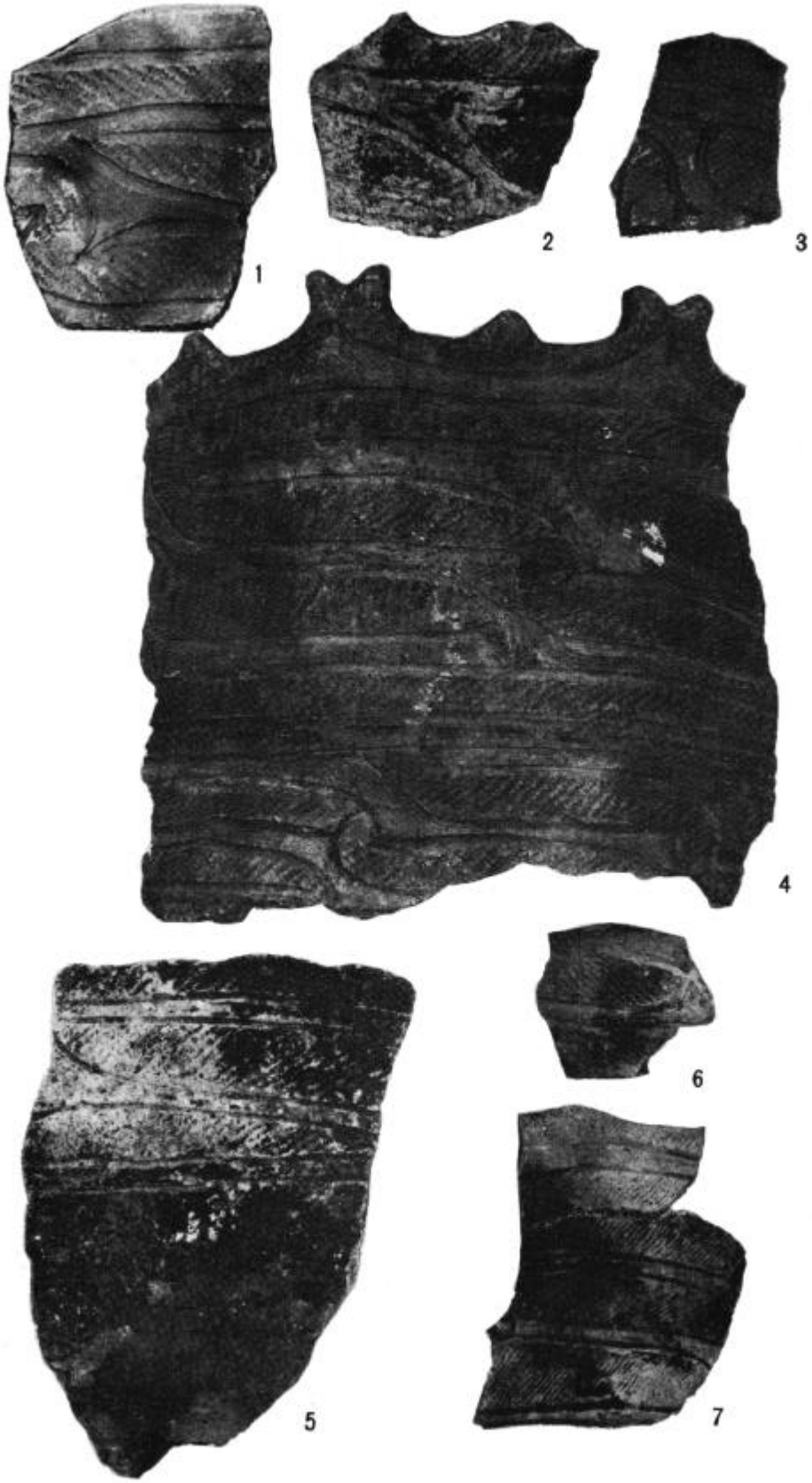
PL 5　第2種土器



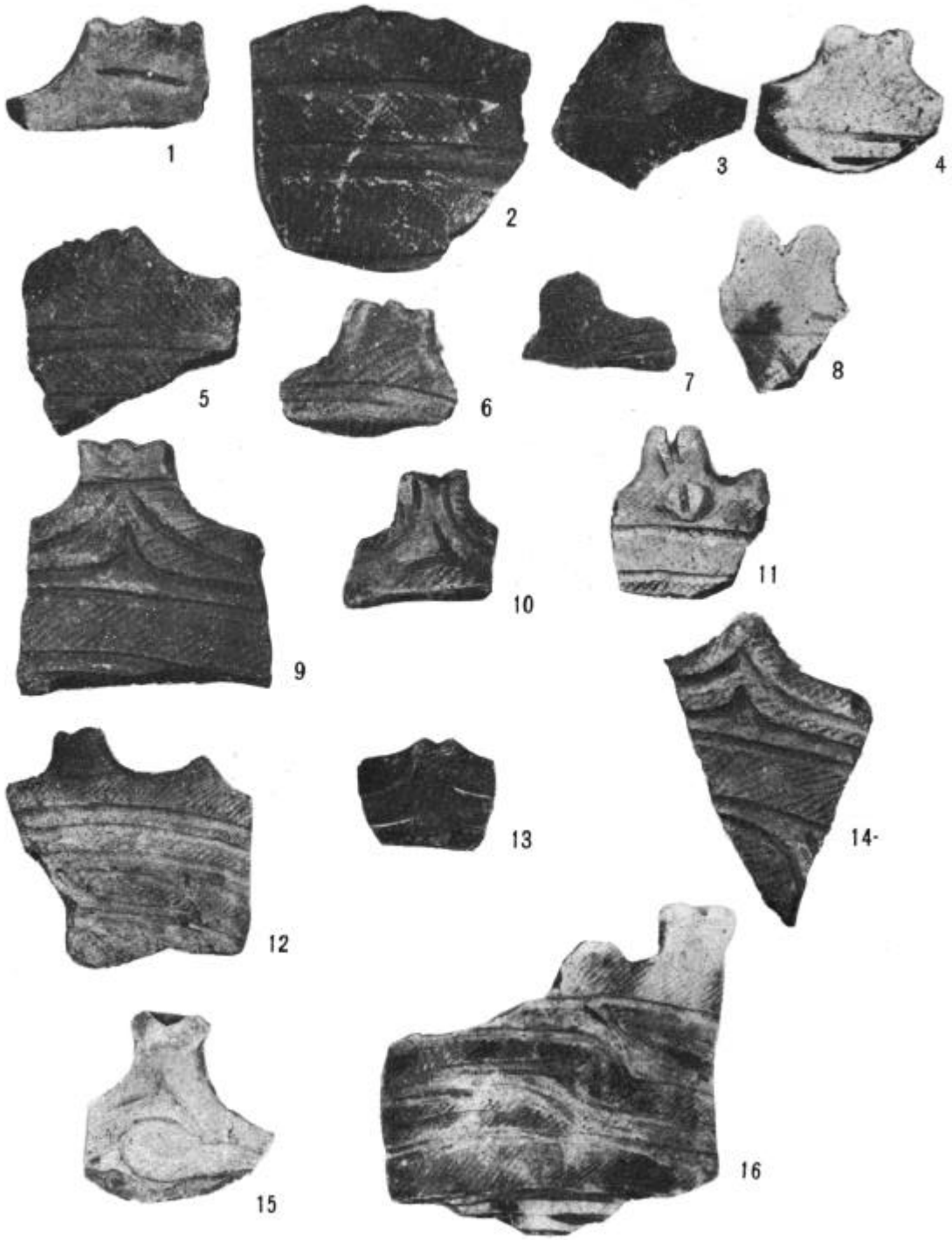
PL 6　第3種土器



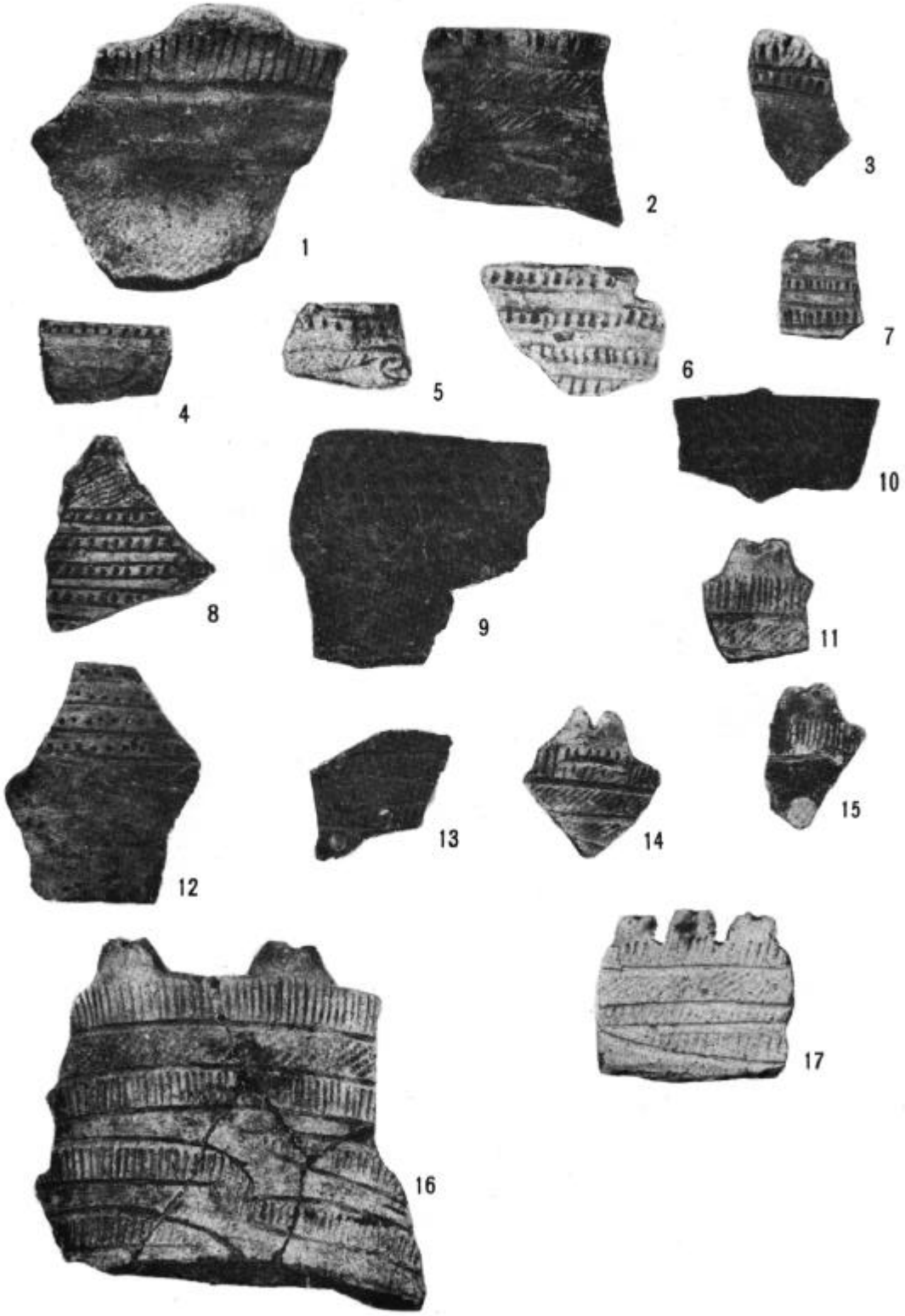
PL 7　第４種土器



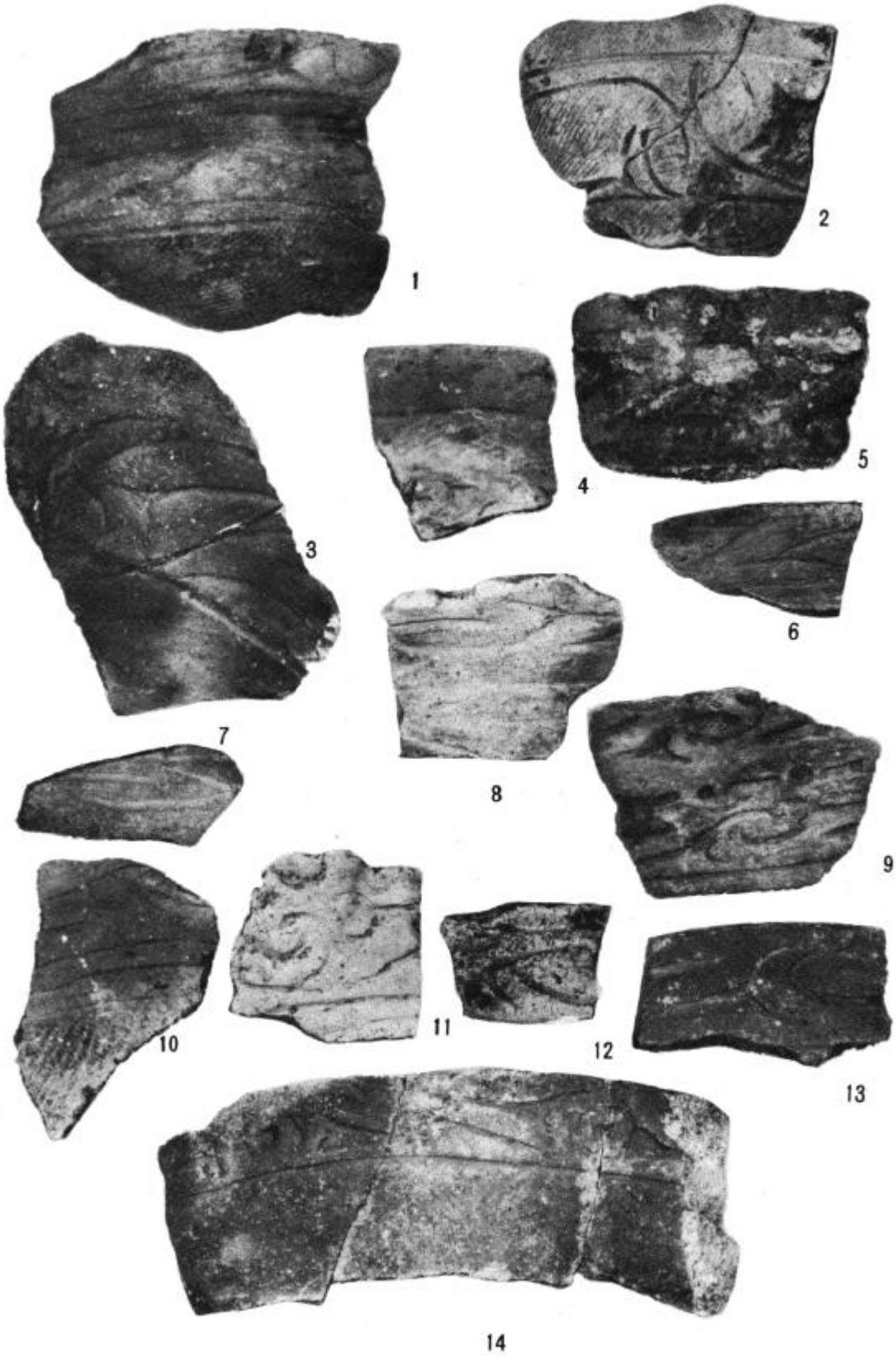
PL 8　第5種土器



PL 9　第6種土器



PL 10　第7種土器

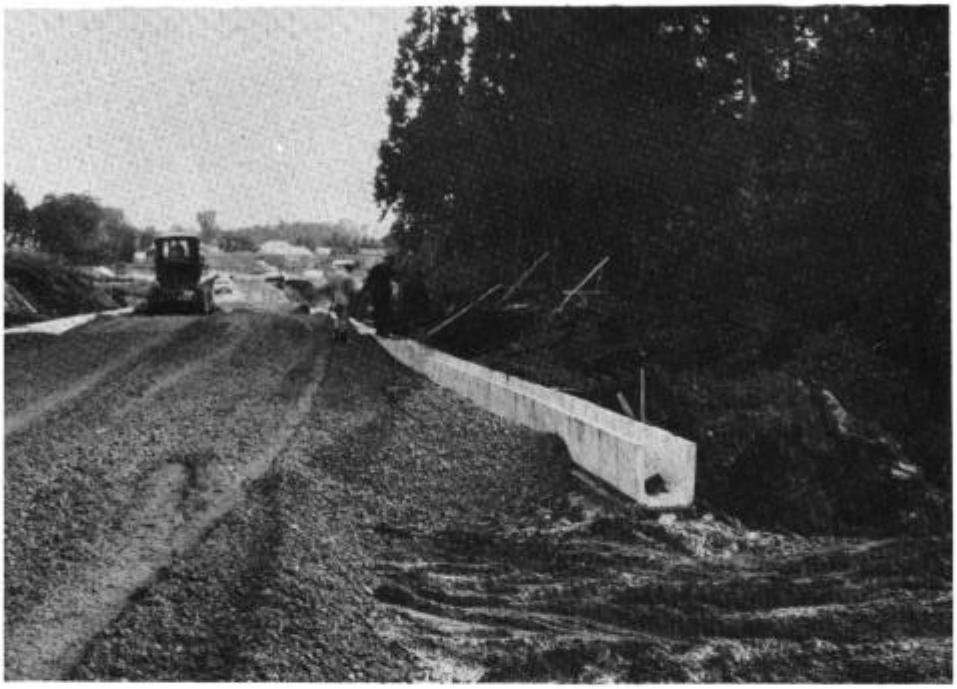


PL II　第8種土器

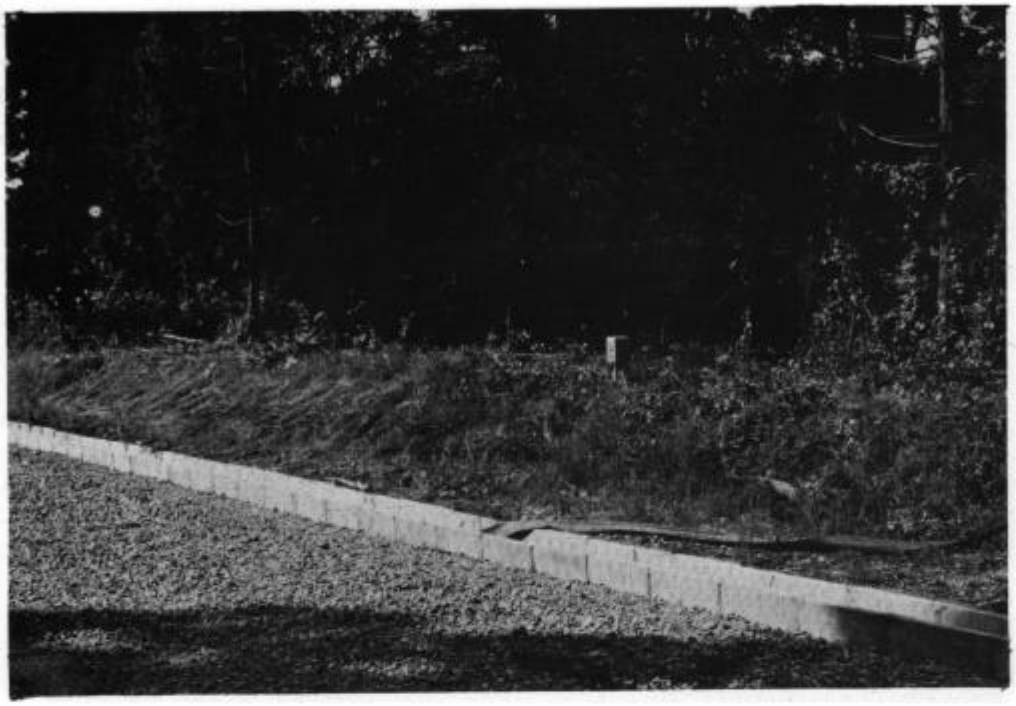
PL 12　土製品・石器

PL 13 石　器

PL 14　〔a〕 上．昭和48年農道工事A地点現場（北東から）
下．法面工事により遺物出土（南から）



PL 14 〔b〕 上．A 地点工事現場（北から）
下．工事により出現した性格不明のピット



PL 15 上．農道工事完成後のA地点
下．トレンチ発掘調査風景

PL 16 上．土器底部出土状態
下．土器出土状態

PL 17 上．大形深鉢の破片出土
下．横型石鏃出土

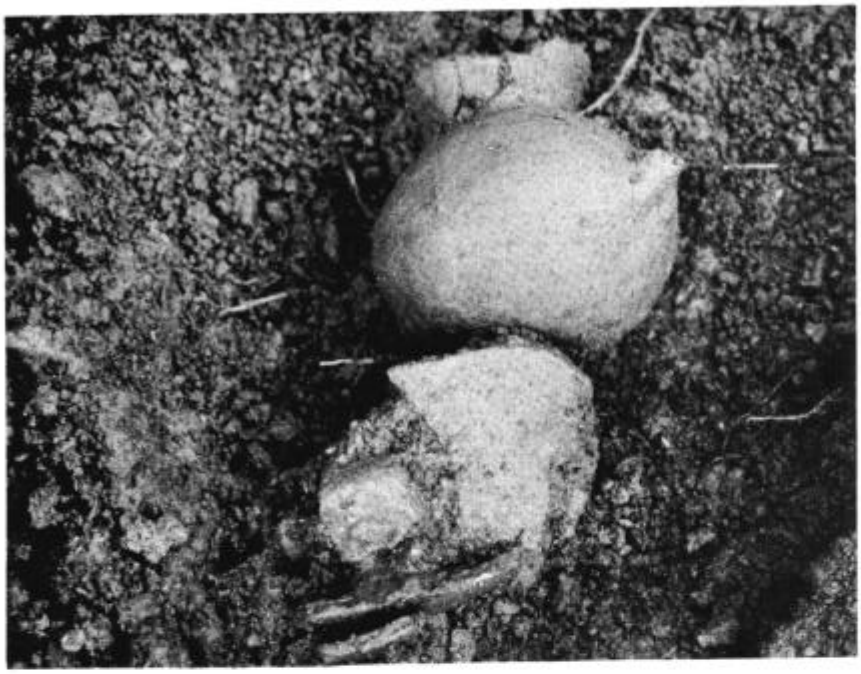
PL 18　上．石のみ出土状態
　　下．Ⅲ区西壁の大湯浮石層と土器底部

PL 19　注口土器出土状態

PL 20　上　Ⅲ区発掘調査風景
　　下．Ⅲ区の土器出土状態

PL 21 上．Ⅳ区に粘質土出現
下．Ⅴ区の注口土器及び底部出土状態

PL 22　上．Ⅳ区・Ⅴ区の石出土状態
下．土器及び石の出土状態（Ⅱ区～Ⅲ区）



PL 23　上．Ⅳ区注口土器出土
　　下．トレンチ全景（Ⅰ区より）

PL 24　上．Ⅴ区南測トレンチ壁の壺出土状態
下．調査終了後埋戻されたＡ地点

PL 25 〔a〕 上．B地点風景
下．Cトレンチ

PL 25　〔b〕 B トレンチ土層写真